裁縫と手藝

5
0

大妻學院
校圖書館

3488

東京都千代田區
大妻学院図書館
3488
昭和

裁 326 593 089-2

大妻技藝女學校々長
大妻コタカ先生著

藝手と縫裁

東京
大興社出版

裁縫と手藝目次

第一講——裁縫實習上の心得……（一）
糸の結び方……（三）
糸の留め方……（四）
糸のつなぎ方……（五）
各種の縫ひ方……（六）
鋏の掛け方……（九）
紮方……（一一）
布の繁理の仕方……（一二）
積り方裁ち方の注意……（一五）

第二講——本裁の單衣物……（一七）
女物單衣仕立上げ寸法……（一八）
女物單衣の裁ち方と積り方……（一八）
女物單衣裁ち方圖及裁ち切り寸法……（一九）
胴當、居敷當の裁ち方……（二四）
本裁女物單衣の標附け方……（二五）
縫ひ方……（二六）
エプロン（二三歳）……（三三）
エプロン（四五歳）……（三七）
エプロン（七八歳）……（四二）

第三講——割烹前掛の仕立方……（五一）
一、ギヤダ付前掛……（五一）
二、袖無の前掛……（五五）
三、袖付き割烹着……（五九）
四、衿刳りの裁ち方二種……（六五）
五、襠入割烹着……（六七）

第四講——繼ぎ接ぎの仕方……（六九）
綿布の繕ぎ接ぎの仕方……（六九）
絹布の繕ぎ接ぎの仕方……（七四）
毛織物の繕ぎ接ぎの仕方……（八一）
子供物着物の掛けの仕方……（八三）
紬製紙の仕方……（八三）

第五講——袋物のこさへ方……（八五）

裁縫教授

（上圖）大妻技藝女學校に於ける裁縫の お稽古
（下圖）大日本家庭女學會主催の講習會

袋物の用具……（八六）
袋物の材料……（八八）
第六講—名刺入の拵へ方……（九〇）
拵らへる順序……（九一）
第七講—君が代銀貨入（三つ折）……（一〇一）
一、裁ち方……（一〇一）
二、張り方……（一〇五）
三、縫ひ方……（一〇七）
第八講—紐飾の結方……（一一一）
材料……（一一二）
結び方……（一一三）
第九講—進物の拵へ方……（一一七）
包紙の種類……（一一七）
包紙の數……（一一七）
包み方……（一一八）
水引の種類……（一一九）
水引の結び方……（一二〇）
表書の書き方……（一二二）
表書の位置……（一二四）
袱紙……（一二四）
折紙と水引の掛け方……（一二五）
水引の結び方……（一二六）
第十講—編物のあみ方（一）……（一三一）
花びん敷……（一三二）
網代編ショールの編み方……（一三九）
七寶編肩掛……（一四四）
第十一講—編物のあみ方（二）……（一四五）
簡單で感じのよいヘヤーピン編の手提……（一四五）
暖かくて丈夫な足袋カバーの編み方……（一五〇）
靴下カバーの編方……（一五六）
赤ちゃんの足袋……（一五九）

裁縫と手藝目次（終）

裁縫と手藝

大妻こたか講述

第一講　裁縫實習上の心得

裁縫

裁縫とは衣服の材料の選び方、積り方、裁ち方、縫ひ方、繕ひ方、其の他洗濯の仕方、保存の方法等で、何れの家庭でも最も大切な仕事で、女子の必らず修めなければならない業の一つであります。

種類

裁縫は衣服の種類に依つて其の仕立方が違ひます、又其の品物の地質によつても取扱ひ方を違へなくてはなりません。それで、裁縫する人は先づ衣服の種類は何であるか、（本裁か、四つ身か、男物か、女物か）其の品質は何であるか（木綿か、絹物か、毛織物か、片面か、両面か、薄地か、厚地か）よく研究して取りかかるこ

運針

裁縫は、運針が基礎で、運針の上手下手は出來上りの衣類に表はれるものであります。又運針の早い遲いは時間の經濟、其の他、いろいろの方面に影響するものであります。それで運針を上手にならうとするには、毎日餘暇さへあらば、針と布片とを持つて運針練習をして上達を心懸けなくてはなりません。

運針の方法　練習するには素縫、本縫の二種があります。

素縫

素縫とは四五寸位の絲を針に通して二重にし絲の端を結ばずに、するすると、拔ける儘にして行くので、この練習は眞直に縫ふよりは、早く縫ふ練習の仕方で、二尺五寸の布を五秒間に一回縫ふ人が普通になつて居ります。

本縫

本縫とは、布全體練習用は二尺五寸位の長さよりも、三四寸位長い絲をつけ、衣類を縫ふ時と、同じ樣に、針目の大小或は眞直等、充分注意して、上手に、そして、早く縫ふ練習をするので二尺五寸の布ならば、一分間に一本位縫ふ人が、普通になつてゐます。

姿勢

運針をするについて注意すべきことは、姿勢を正しくすることであります。

裁縫の基礎は運針であると同じ樣に、裁縫する時の姿勢は運針する時の姿勢が習慣となりますから、充分注意することは衛生にも宜しいのでございます。

運針の姿勢は胸を張り、上體を眞直ぐにし、兩肱を張り眼より八九寸離れた高さにし、兩手の距離は初めは五六寸より段々多く離して、熟達するに從つて、七八寸にし、左右の手を同じ樣に活潑に動かすのでございます。

布は最初は晒木綿で練習して、漸次三河木綿紅絹などを用ひて、あらゆる布類を容易に縫ふことの出來るやうに練習する必要があります。

裁縫する時の絲の結び方、種々の縫ひ方、留め方、絎け方、襞の掛け方なども運針と共に、基礎となるもので必要でございます次にそれぞれ說明致します。

糸の結び方

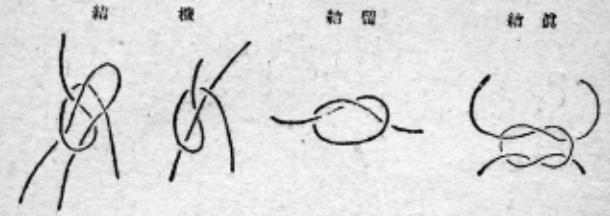
糸の結び方

眞結

留結

(1) 眞結（細結とも云ふ）　絲の兩端を圓の樣に結び合はす仕方で、袷綿入の袖口、八つ口、袖付留をする場合又は襞を掛ける途中で絲を繼ぐ時等に用ひます。

(2) 留結　絲の端を食指の腹に卷き、拇指の腹で絲を撚り乍ら結ぶ仕方で、縫



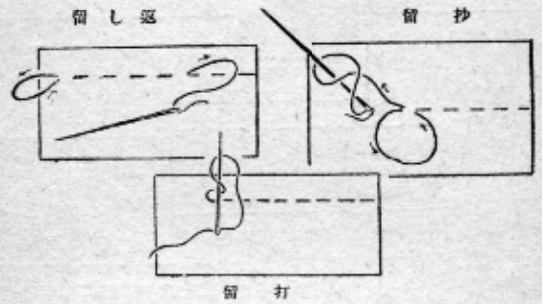
ひ始めになど用ひます（玉になるので玉結びとも云ふ）

(3) 機結　絲の兩端を右を下に左を上に重ね、左の食指の上に置き右の絲を左に廻らして、右の絲の端の下を通り左絲の端の上を通り、次に左絲の端を折つて右絲の輪に入れ左の拇指で押へて、右絲を引締めます。絲を途中で繼ぐ時に用ひます。

絲の留め方

(1) 打留　左手の拇指の腹で針を布に押へ、右手で絲を卷き付けて針を引抜きます。抄留返留以外のすべての絲留に使ひます。

(2) 抄留　縫ひ終りなどを、縦か横かに布を極僅か抄つて、それから、打留のやうに、絲を針にからんで、針を引抜き少し縫返す仕方で、衣類の要所、單衣の袖口、袖付、衿先、身八



つ口等は、この留方を用ひます。

(3) 返し留　縫ひ終りを少し縫ひ返して留る仕方で、衿先、脇縫等に用ひます。

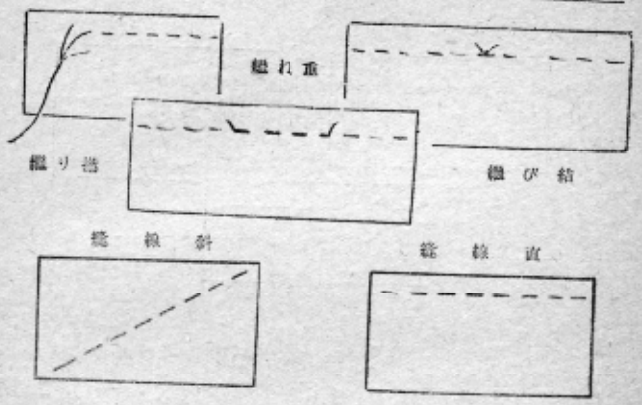
絲の繼ぎ方

(1) 結び繼　機結びに繼ぐ耳新鋏等の途中で絲を繼ぎ足すに用ひます。

(2) 重ね繼　縫ひ合せの途中で絲の盡きた時、新らしい絲を留め結びして、五六分前から縫ひ初め前の縫ひ絲に割り込んで縫ひ重ねる仕方で背縫脇縫其他の縫ひ目に用ひます。

(3) 撚り繼　繼ぐべき絲の端を二つに割り、其の割つた絲の一方に撚り合せる仕方で、絹物の縫ひ方、又は紵け方などに用ひます。

各種の縫ひ方　直線縫　斜線縫　合せ縫　二重縫　綿み縫



各種の縫ひ方

(1) 直線縫　眞直に縫ふ所に用ひる縫ひ方で、衣類の大部分は此の仕方であります。

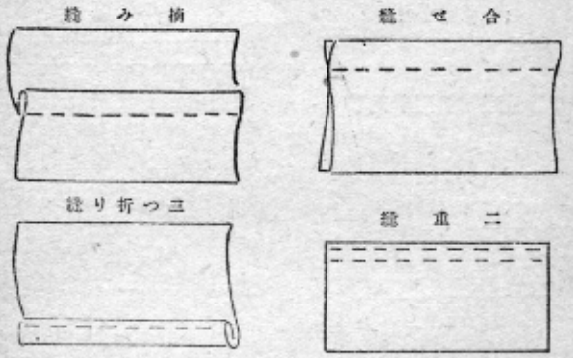
(2) 斜線縫　斜に縫ふ仕方で袵付、衿付、袖付、羽織の繕付等に用ひます。

(3) 合せ縫　布と布とを合せて縫ふ仕方であります。

(4) 二重縫　合せ縫ひをして、其のままでは縫目が開いて困る場合に其の耳は、又端を今一度縫ひ合はす仕方で、本裁の單衣の背縫等に用ひます。

(5) 摘み縫　布を切らぬ處に縫目を拵へる仕方で、四つ身の袵、大幅物の背縫等に用

三ツ折縫　袋縫　伏縫　折伏縫



ります。

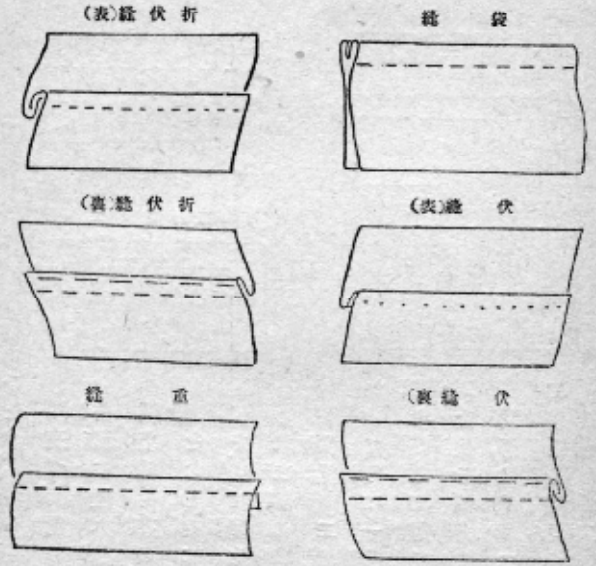
(6) 三つ折縫　布の端を二度折り、裏折代の端を普通に縫ふ仕方で、風呂敷の端等に用ひます。

(7) 袋縫　布の表を出して一分位の縫代に合せ縫をなし、更に返して、裏を出して四五分位の縫代で、合せ縫をする仕方で、單衣物の裾の底、絹布の單衣物の背縫などに用ひます。

(8) 伏縫　二枚の布を縫ひ合はせ縫目に折をかけて、裏に一分か二分位の針目表には小さく針を出して縫込みの端を伏せ置く仕方で、布の耳を伏せる時に用ひます。

(9) 折伏縫　二枚の内一枚を一分五厘位控へて縫合せ縫込みの少ない方へ折をかけ、更に長い分を折つて、其の上を伏縫と同じやうに致し、

重縫　かがり縫　突合せ縫



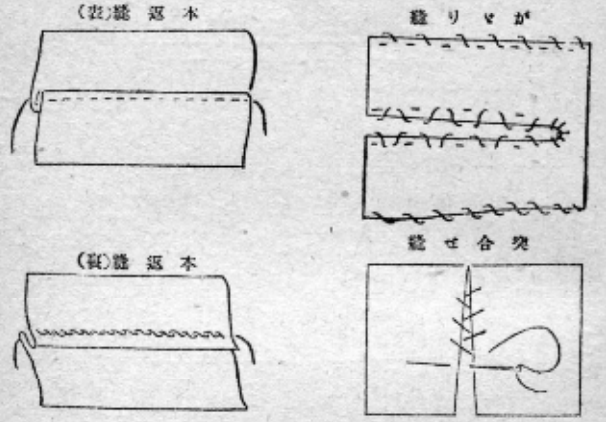
布の裁目の時等に用ひます。

(10) 重縫　裁目のままを重ねて一筋か二筋か縫合す仕方で、紐や帶の惹地等を接ぐ場合に用ひます。

(11) かがり縫　裁目のほつれを防ぐ爲めに、端を卷きながら縫ひ行く仕方で、衿、肩明、釣紅、毛織物の裁目等ほつれて困るところに用ひます、そして、衿肩明の角は、一針拔きに致します。

(12) 突合せ縫　裁目のままの布を双方から合せて、一分

本返縫　半返縫　襟の掛け方　平襟　綴襟



位の深さに針を布の端に交る〳〵掛けて縫合す仕方で、地厚の帶惹、衿惹等を接ぎ合す時に用ひます。

(13) 本返縫　一針縫つて針目の全部を返して縫ふ仕方で、ミシンの代用に致します。

(14) 半返縫　一針縫つて針目の二分の一だけ返つた處から縫ふ仕方で、縫目を割る時に用ひます。

襟の掛け方

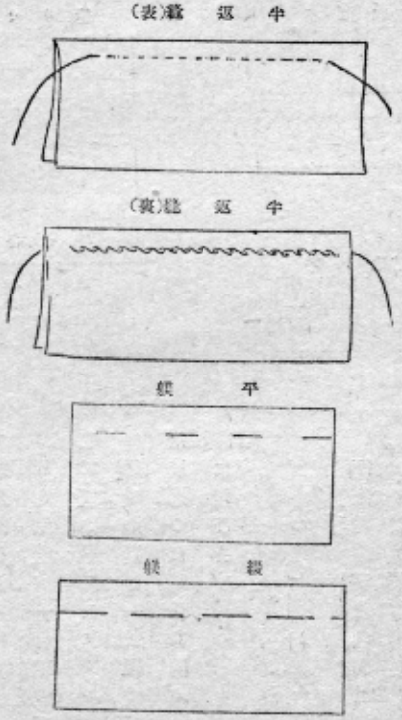
(1) 平襟　裏表共同じ針目で綴ぢおく仕方で、羽織の衿、帶の端などに用ひます。

(2) 綴襟　表に一寸以上裏に二三分位の針目にして綴ぢるので幾枚かを一緒に綴

重縫　　隱縫

る時に用ひます。

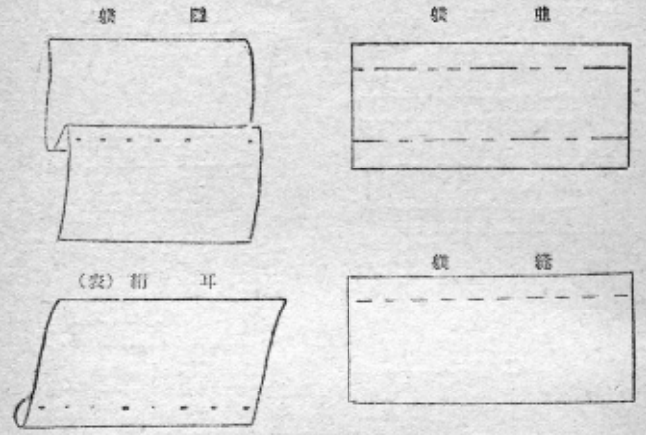
(3) 並縫　雌針雄針とも云ひ雌針一分五厘位雄針一寸位に致します、又小針の數によつて一目落し、二目落し、三目落しとも申します。二目落しは木綿に、三目落しは絹物に用ひます。又、針目の大小は、品と場所とによつて



て應用致します。

(4) 縫縫　ぐし縫とも申します。並縫の針目で縫を掛ける仕方で、縮緬、メリ

隱縫　　桁方　　耳桁　　三ツ折桁



ンス等に用ひます。

(5) 隱縫　仕上げて後に取り捨てぬ糸に、其色の絲で五六分置きに表の針目を小さく出します、袖先、綿入羽織の前下り、胴接等に用ひます。

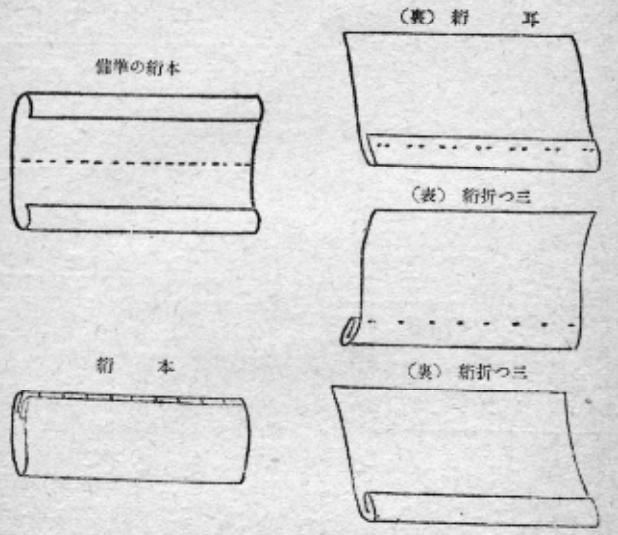
桁方

(1) 耳桁　縫ひ込みを裏に折り耳の端を桁ける仕方で、裏に一針小さく出し小針に表に一針、又裏に一針出し、布と耳との間を通る、針目は品と場所とによつて三分位から六七分位の大きさにして、木綿の單衣等に用ひます。

(2) 三つ折桁　布の裁目を隱す爲めに

本紬

まつり紬

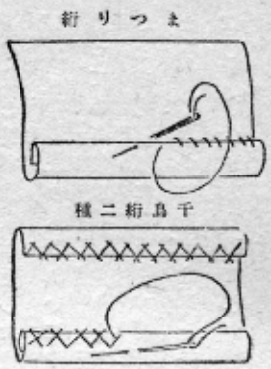


端を二度折つて、表に小さく裏の山の折目の中は品と場所とに依つて、三分から五分位迄の針目を通して紬けます、單衣の袖口、衿下、据紬等に用ひます。

(3) 本紬　布の兩端を折り、それを又二つに折り、折り山から二三厘中側を二分から三四分迄の針目に、前ふも手前も同じ大きさにして紬ける仕方で、冬物の衿下、八つ口等に用ひます。

(4) まつり紬　布を三つ折にして右の端から絲を掛け始め、先づ表の布を少し抄ひ其の針先を斜に三つ折の上に出し、一分位の針目に紬けます。毛織物やミシン仕立の紬ける場所に用ひます。

千鳥紬



(5) 千鳥紬　布の薄い物は三つに厚い物は二つに折り左の方から折目の端の所では表に小さく出して、折目では表に出さずに紬けて右に進む仕方で、毛織物又は地厚の單衣物などの伏縫又は紬ける場所に用ひます。

(6) 撚紬　布の端を紙の小撚を撚るやうに撚つて、小針にまつり紬をする仕方で、上仕立の單衣の袖口、夏コートの竪衿の端などに用ひます。

布の整理の仕方

(1) 湯通し　毛織物などは着て居る内に丈がつまつて來ますから、反物の間に湯通しを致しますと縮む物は縮みますから、それから後に裁ちます。

糊抜

(2) 糊抜　新らしい物を其儘仕立ますと、雨で濡れても微になつたり汚點になります。之れは糊が出て其の雨又は汚點の爲めに微が出たりなどして目立つのでありますから、最初に糊抜をして置かなくてはなりません。その仕方は入浴の出來る位の溫度の湯五六升に、布の一方の端から段々と入れて充分浸し、十分間の後引上げて絞らずに乾します。

地直し

(3) 地直し　布目が曲つてゐたり幅がでこぼこしてゐたり、耳がたるんだり或はつれたりしてゐる物を平に直すことを地直しと申します。

湯通し又は糊抜きをした後に地直しをして、それから裁ち方にかかると仕立が樂で出來上りもきれいに出來着具合もよろしうございます。その仕方は曲つてゐる布は、布の曲りと反對に兩耳を斜に持つて引きのばし、次に横に引きますと眞直になります。耳のたるむ物は、耳を少し濕して鏝をかけると縮みます。耳のつれる物は端を紙臺にかけ一尺位離れた所を充分に引き、鏝でのばします、つれ方の甚だしい物は所々に鋏を斜に入れて切り込みを入れます。幅の充分ある物は耳を切り去つても差支へありません。

積り方裁ち方の注意

仕立上げ寸法に就て

標の付け方に就て

積り方裁ち方の注意

衣類を裁つ前に先づ織斑、染斑などの有無を布全體に亘つて調べ、もし有らば其れを隱すやうに工夫して積らなくてはなりません。

布の調べが終りましたらば總丈を計り、各部分の寸法を積つて見て必要の寸法よりも布が不足ならば、各部を少し短かくするか或は裁ち方を變へるか致します。布が餘る場合は寸法を充分にしてなほ餘ります場合には殘して置きますと、燒穴、鈎裂など出來た場合に用ひることが出來ます。

仕立上げ寸法に就て、縫ひ方は上手でも、着用してから身體に合はないと見苦しいものでありますから、着る人が肥つた人か痩せた人か大きい人か小さい人かを確めて、その體格に合ふやうに仕立上寸法を定めます。

標の付け方に就て　裁ち終つた布は表を中にして折り、總べて上部を左に下部を右にして平に置きます。例へば袖は袂底を右に、袖口を向ふに、身頃は衿肩を左の手前に、後幅を上に。

縫ひ方に就て

篦は細く小さく付けて、それを重なつてをる布に段々に寫します、毛織物などで篦の付き難い布は絲標かチョークを使用いたします。

縫ひ方に就て　標通りに待針をして、着用の後縫目の撰がるところは（脊縫、脇縫など）針目を小さく、縫目の撰がらぬところは（袷の袖口裾など）縫目を少し荒く、綻び易いところ（袖付、袖口など）は留をしつかりとして、全體に亘つて、絲のしごきをよくすることに注意が肝要であります。

付衿付の如きは三厘位。　袷の袖口八つ口裾合せなどは六七厘位の折りきせにした方がよろしうございます。

仕上げ

全體に亘り折りきせが多いと仕上りはきれいに見えますが、着てから崩れて來て袵が出來ては困る場所の裏がふいり、表がふいたりいたしますから、折りきせは少い方がよろしうございます。

仕上げ　縫ひ終つたならば仕立上げ寸法をよく調べ、針や絲屑などが付いていないか其他萬事に注意して全體を調べた後、木綿物は水霧を吹いて重押をし、毛織物は水霧を吹いて強いアイロンをかけ、絹物は水霧なしでアイロンをかけ輕い押をしてをきます。

本裁

第二講　本裁の單衣物

本裁とは、普通一反の布を裁ち合せて、一枚の着物に仕立てたものでありまして、これを大人物といひ、十四五歳から着用致します。衣服の種類は澤山ありますが、その最も基礎となるものは、本裁の單衣であります。そしてこれには男物と女物とあります。

地質

單衣物にはどんな地質を用ひるか、次にそれを書いて見ませう。

木綿織　平木綿、瓦斯、紡績、縮類、

麻織　かたびら、上布類、

絹織　銘仙、すきや、つむぎ、お召、絹、縮緬類、

交織　種々

男物は女物とくらべて、地質、縞柄等は範圍が狭ふございます。肩當や居敷當は男女共晒木綿、麻布、モスリン、練絹の類を用ひます。裏衿にはモスリン、練絹、絹、縮緬の類を用ひます。男物は晒木綿、メリンス等を用ゐます。

女單衣寸法

女物單衣仕立上寸法

袖丈　一尺六寸内外　袖口　六寸　袖付　六寸五分

袖幅　八寸五分　身丈　三尺九寸内外　衿肩明　二寸二分

身八口　三寸　後幅　七寸五分　肩幅　八寸

衽下り　六寸　前幅　六寸　抱幅　五寸五分

衿幅　丸衿一寸五分　廣衿　三寸　紐　一尺六寸五分

以上の寸法は普通の體格の人の着物の仕立上寸法であります。仕立上寸法は、それを着る人々の身長體格によりまして、着心地や、格好等のよい樣に仕立なければなりませんから、實際に仕立ます場合には、其の人に適當な寸法に依るべきであります。

棒衽裁
鈎衽裁

女物單衣の裁ち方と積り方

棒裁と鈎裁の二種の裁ち方があります。棒衽裁を普通としますが、用布の長さの不足の場合又は地厚物で衽の先に縫ひ込が多くては、仕立るに因る樣な場合には鈎衽裁ちに致します。けれども鈎衽裁は片面物には出來ません

稀名の事各女單物女

第一圖（裏）

第二圖（表）

し、又仕立直しをした時に、衽を上下に取り替へる事も出來ませんから、不便であります。一反と申しますと、二丈八尺を普通として居ります。棒衽裁の布の數は袖左右必要であります。その寸法は袖丈の四倍入ります。

身頃も左右必要で同じく、身丈の四倍要ります。衽は半幅で左右必要で、身頃より衽下りだけ短い丈二枚必要であります。衿は衽を半幅取りました殘りの半幅でありますから、長さは衽丈の二倍あります。この布數を合せまして、本裁單衣の裁ち方となり、一反の布を少しも、むだにせず裁ち合せます。

女物單衣裁ち方圖及裁ち切り寸法

布をよく調べて、耳の吊たり、延たりしたのを直し、傷の有無を充分注意します。そして、着る人の體格によつて寸法を定め、計算をして裁方に掛ります。

二丈八尺九寸の布を以つて棒衽裁ちの裁ち方、積り方計算をして左の裁ち切り寸法に依りて裁ちます。

用布　並幅　二丈八尺九寸

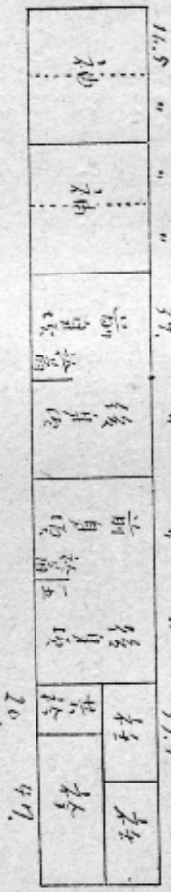
身丈　三尺九寸　衿肩明　二寸五分　袖丈　一尺六寸五分　衽幅　四寸八分

棒衽裁方圖

衽下り　五寸五分　衿丈　四尺七寸

圖　三　裏

圖 方 5 棒 衽 裁 單 女 物 本



積り方公式及び算式

(イ)袖丈と身丈とが知れてあて總丈を知るには

公式　(總丈－袖丈×4＋衽下り×2)÷6＝身丈

算式　(16.5×4＋(3.9×6－5.5×2))＝289寸

(ロ)總丈と袖丈が知れてあて身丈を知るには

公式　(總丈－袖丈×4＋衽下り×2)÷6＝身丈

算式　(289 − 16.5 × 4 + 5.5 × 2) ÷ 6 = 39

(ハ)總丈と身丈が知れてゐて袖丈を知るには

公式　{總丈 −(身丈 × 6 − 衽下リ 2)} ÷ 4 = 袖丈

算式　{289 − 39 × 6 − 5.5 × 2)} ÷ 4 = 16.5

(ニ)衽丈を知るには

公式　身丈 − 衽下リ = 衽丈

算式　39 − 5.5 = 33.5

(ホ)衿丈を知るには

公式　(身丈 − 衿下 + 衿肩廻 + 衿先縫代) × 2 = 衿丈

算式　(39 − 19 + 25 + 1) × 2 = 47

(ヘ)共衿丈を知るには

公式　衽丈 × 2 − 衿丈 = 共衿丈

算式　33.5 × 2 − 47 = 20

積り方が出來て裁ち切り寸法が定まりましたらば、先づ袖丈を計り、之れを

四枚折り重ね其上に身丈の四枚を折り重ね、次に衽丈の二枚を折り重ねます。そうすると圖に示した樣になります。

次にこれを裁ち切るのでありますが、まづ尺度をあて、寸法を調べ、更に枚數も調べて、間違ひのない事を確めた後に裁ち切ります。

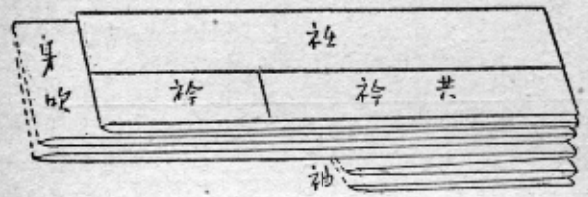
第一に袖四枚と身頃四枚との境目を切り放ち、直ちに袖は二つに切り放ち、左右の袖を別々に二つに折つておきます。

次に身頃四枚と衽二枚との境を切り、身頃を四つに折り、之れに衿肩明を二寸五分明けて、裾の輪を切つておきます。

衽と衿は半幅にするのでありますが、幅が充分にない物は衿幅の方を少し狹く裁ちます。衽幅が四寸八分位の裁ち切りになる物は半幅でよろしいの

第四圖

用布を(袖)(身頃)(衽)と折りたる圖

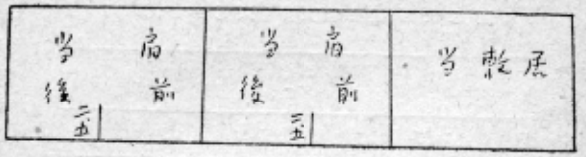


寸法の再調

肩明

共衿
衿裏
三ツ衿芯
肩當
居敷當

第五圖



であります。紅は二枚切つて、衿は衿丈を定め、共衿と切り放ちます。之で裁ち終へましたから、次には衿裏肩當、居敷當、三つ衿布を用意しておきます。

衿裏丈　四尺七寸　肩當布　三尺
居敷當　一尺二三寸　三つ衿芯　半幅六寸位

肩當は表の地質によつて寸法を違へたり、又横布を使ふこともあります。薄物は肩當や居敷當を用ひないのを普通として居ります。

肩當は殆んど別布を用ひますけれども、居敷當は表の殘りがある場合には共布を用ひることがあります。

肩當　居敷當の裁ち方

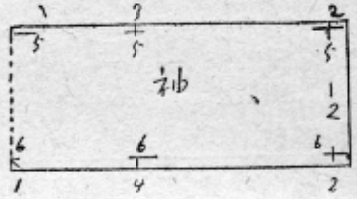
肩當は後前の寸法を違へることもございます。それを前後の差と申し二寸か二寸五分位後を長く裁ちます。これで女物本裁單衣一枚の全部を裁ち終りました。

標附け方
單衣序
袖の標附け方

本裁女物單衣の標附け方

順序
1 袖　2 後身頃　3 前身頃　4 衽　5 衿

第六圖
袖標附方圖



1 袖、中表に二つに折り、輪の方を左に袖口を向ふにして兩袖を重ねて正しくおきます。

(一)袖の山標、袖付の方の輪の端に山形に標をし袖口には標はつけません。

(二)袖丈、出來上りの寸法に約五厘多く、向ふ手前中央の三ヶ所。

(三)袖口、向ふ側の左端から計ります。

(四)袖付、手前の山より計ります。

(五)袖口の紵代、向ふ側の耳端より三分。

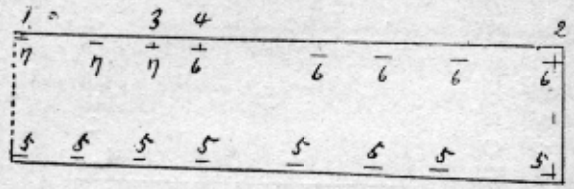
(六)袖幅、袖口の縫代より袖付の方に向ひ出來上りの寸法に五厘加へます。

これで袖の標がつきました標が不明になると困りますから、少さくてはつきりとよくわかるやうに一枚毎にうつしておきます。

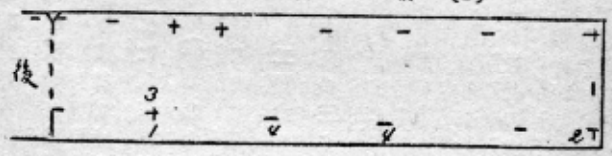
身頃の標附け方

第七圖

(1) 後身頃標附方



(2) 前身頃標附方



2 身頃

中表に二枚合せ衿肩から二つに折り後身頃を上に衿肩明を左に脊を自分の方にしておきます。

(一)肩の山標、(二)身丈の裾の新代を五分、(三)袖附の標、(四)身八ッ口、(五)背縫の縫代を三分(脊縫は綿又は綿を通す)(六)後幅、(七)肩幅、

後幅は出來上りの寸法より一分廣く(肩幅も同樣)

これで後身頃の標は終りましたから、一々下の布にうつして標をし、後身頃を卷いて前身頃の標をつけます。

先づ後身頃の標をうつし

袖の標附け方

(二)袖下り、(三)前幅、出來上りより五厘位廣く、(三)抱幅、(四)袖付裾から約一尺位を眞直に致しますと、着心地が宜いのであります。そして抱幅を目標に斜につけ、袖下りから裾迄の寸法を計ります。之は袖の丈を知るのであります。

身頃はこれで終りましたから下の布に標をうつしておきます。

3 袖の標附け方

表を中にして左右の袖を合せ袖先を左に衿下(裁目)を自分の方にして正しくおきます。

(一)裾の新代五分 (二)衿下(三分を眞直に) (三)袖幅(出來上りの寸法に五厘加へて) (四)相褄幅(袖幅より四分少く) (五)合褄と袖裾幅とに尺度を當て斜に標し、それより上は袖丈の標のところで自然の斜より三分位縫代を多く (六)袖丈 (七)衿附 (五)の標より一分はなして標をつけ、それより衿下の標迄に尺度をあてて衿附けの標をつける。

4 衿附の標附方

衿附の標附け方

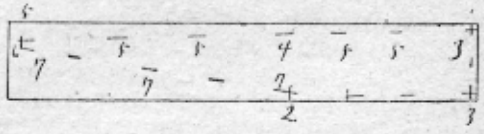
衿を中表に二つに折り輪を左に衿附(裁目)を向ふにして裏衿を下に表衿を上に重ねます。

(一)衿山、(二)衿丈、(三)衿附の縫代三分、(四)衿幅の標、出來上りより五厘廣く、裏衿はそれより一分せまく、

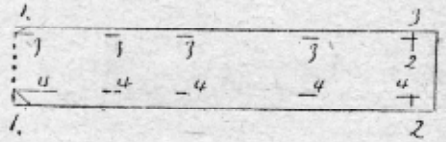
これで標附は全部すみました。

第八圖

(1) 衿標附方圖



(2) 衿標附方圖



袖縫方

袖、裏を中にして二つに折り、袖下の處の兩端を約一寸位づつ致して五厘の縫代で引き返して裏を出し、標を合せて待針をし、振の方から縫ひ始め、角の所では標の外側を縫ひます。袂の丸味をつける物は角の五分の間を丸く縫ひます。袖口明の處は抄留をし、一寸程返し縫にして、それから打留をしておきます。

これで縫ひ終りましたから折をして角を綴ぢ

背の縫方

ます。その時袖下を先に袖口下を後より折ります。次に袖口の三つ折り綴を致します。外袖も内袖も袖口留の兩側に必らず一針出し、内袖の方は更に一針綴けます。

身頃、脊縫から始めます。先づ衿肩明をかがり、ここを右にして脊を縫ひ、裾は返し留めにします。二重縫は肩當と居敷當の處はいたしません。

肩當附方

肩當と居敷當　先づ肩當の端を二つ折りにして三分位の針目で伏縫をし居敷當は下の一方だけ伏縫をしておきます。

肩當の脊を縫ひ衿肩明を右にして、身頃の向側に當て、脊縫を揃へて縫目の際を綴ぢます。そして身頃と肩當とを左右に開き、衿肩と前身頃の縫込み及び幅の兩脇を綴ぢます。

居敷當附方

居敷當は二つ折りとし、衿下の寸法二寸五分加へた高さの所より肩當と同じやうに、居敷當を身頃の向ふに當て、脊縫に五六分の針目で綴ぢつけ開いて下の方を除き、他の三方を後巾に綴けつけます。

脇縫

脇縫と脇綴、一方は前身頃を見て、一方は後身頃を見て兩脇を縫ひ、前身頃

の方に折り、縫代を割つて割り躾をし、縫込みの耳は縫込みの深い物又は薄物は折り、其の他の場合は耳のまま身頃に紐付けつけます。

衿下紐　衿下紐、兩衽の衿下を、合褄の標より約一寸位上まで三つ折紐に致します。

衽附　衽附、次に前身頃及び衽の標をよく合せて、待針をうち前身を見て縫ひます。折は衽の方に、前身頃の縫ひ込みの端は耳紐又は折紐にします。

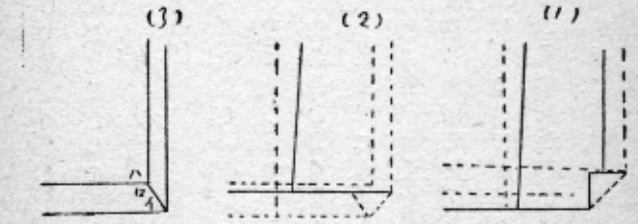
裾紐　裾紐、裾紐代を三つ折りにし、褄先を圖の如く折り、(イ)(ロ)(ハ)の順に針目を出して紐け、其他の處も表は極く小針に、裾を手前にして、縫目毎に一針づつ表側に出して、其の所をしつかりと止めるやうにして紐けます。

衿附　衿附、表衿の縫代を折り、衿の山と脊とを合せ脊は五六分、衿肩明の處は一分の縫代にして待針を打ち、衿肩明の左右三分位の處で衿を充分弛め、それより衽先から三寸下までは衿を心持ち弛め、以下は衿を少し張り加減に致します。次に裏衿の縫代を折り、表衿と合せて下前衿先より上前衿先まで縫ひつけます。

縫ひ方は、脊縫の處で一針返し、衿肩廻りを小針に、衽先の處は待針をぬいて

袖の附方　**衿の折方**　**衿附縫方**

第九圖　裾の折り方

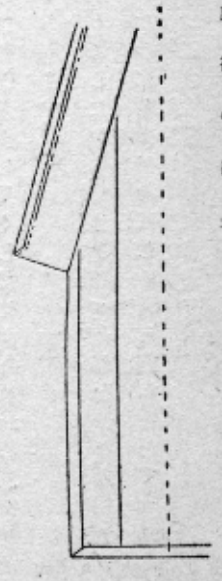


その穴に針を刺し、約一寸位一針抜きにし、他は普通に縫ひ、衿先は左右共抄留めとして、折は衿の方に返します。

衿紐　衿紐、三つ衿布を入れ衿幅を定めて折り、衿先に堅く四つ留めをして、その糸で衿先を縫ひ、折りは裏衿の方に返し、衿先の裏側は圖の如く褄形にし、躾をかけて三分位の針目で紐けます。

袖は身頃の脇明を折り、山標の處を約一分の縫ひ

第十圖



廣衿の衿先

代にして袖附の標より斜に折り、袖幅の標を合せ、山と附とに待針を打ち、袖を見て縫ひ、抄ひ留めで終りも始めも留め、山で一針返します。袖の方に折りをして振を紮けます。振八つ口は折る場合もありますが、多くの場合は耳紮け致します。

共衿附方

共衿、共衿丈の中央を脊に合せて、衿と縞目をよく合せ、共衿の方は、少しゆるめ加減に致します。そして要所、即ち衿肩廻り、剣先等に待針をし、下衿より一二厘位共衿を出す位の程度で細かく紮けつけます。

衿糸

衿糸、衿糸は二本のより糸で衿幅を二つに折り、脊と兩肩の三箇所で二枚の衿を抄ひ、衿糸の丈を、衿幅の二倍より少し長くして切り、それから三ケ所の絲はそれ〴〵兩端を結ぶのであります。

仕上

仕上げ、これで全部縫ひ上りましたから、寸法を調べ、糸屑を除き、木綿物は霧吹で水霧を吹き、手できれいにのばし、折目を正しく畳み、重押をしておきます。銘仙以上のものはアイロン又は火熨斗を掛けます。

絹布は重押よりは輕く押しておく方がよろしいのであります。

二三才用

裁切つたまゝで出來る

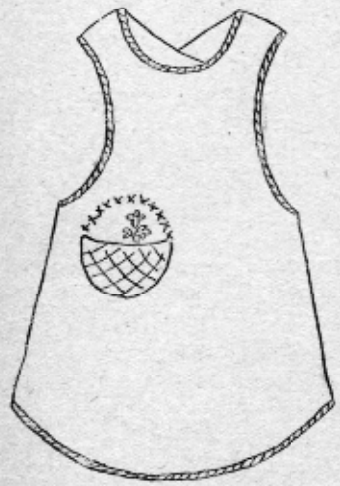
「エプロンの仕立方

◇エプロン(二三歳)

このエプロンは圖の如く、極くあつさりした形でありますから、ポケットに花籠をつけて面白味をつけます。

ヨチヨチ歩き初めの御子樣に誠に可愛く似合ます。

出來上り圖 (イ)



そしてこれは裁切つたものが其ままで出來上り形になつて居りますので別に縫ひ合せる處はありません。ただ裁ち目の廻り全部を斜切かテープでおさへておくのであります。

斜切は裁目を覆ふ爲に用ひるのでありますが、一つには飾りと

後の形は十字メスキ

標の付け方

斜線の引き方

用布

出來上り圖(2)

裏返し

もなりますから、なるべく引立つ色を用ひた方が宜しいのであります。

出來上り圖(2)の(イ)は(ロ)のスナップに、(ハ)は(ニ)のスナップに留めます。つまり後は十字形のタスキになるわけであります。

用布幅二尺二寸　長一尺三寸

地質　キャラコ

斜切又はテープ　八尺

裁ち方

第一圖の(1)の樣に裁ちます。

先づ布の幅を二つに折りまして圖の樣に置き、イロハの順に標附を致します。

(イ)は端より三寸二分(ロ)は端より二寸二分(イ)と(ロ)とに斜線を引きます。(ハ)は裁目より三分入り(ロ)より一寸二分、——(ニ)は端より五寸(ホ)は端より五寸として(ニ)と

裁切り線の引き方

第一圖の(1)

(ホ)で直角を作ります。(ヘ)は(ニ)と(ホ)の線の角より(ホ)線を、五分延ばします。(ト)は(ヘ)より七分入つた處と(ハ)とに斜線を引きます。(チ)は裁目より八分(リ)は裁目より四分入つた處に(チ)より一寸二分(ヌ)は(リ)と(ヘ)とに斜線を引きます。(ル)は右端の輪より二寸五分(ヲ)は(ル)と(チ)に斜線を引きます。

これで第一圖(1)の線が全部、出來ましたから、次に第一圖(2)の樣に裁切線を標します。

(ワ)は(イ)と(ロ)の中央にて六分(カ)は(ハ)と(ヘ)の中央にて一寸二分(ヨ)は(ヘ)と(ト)の中央にて一寸(タ)は(チ)と(ル)の中央にて一寸五分として各々圖の如く丸みをつけて裁ち切り

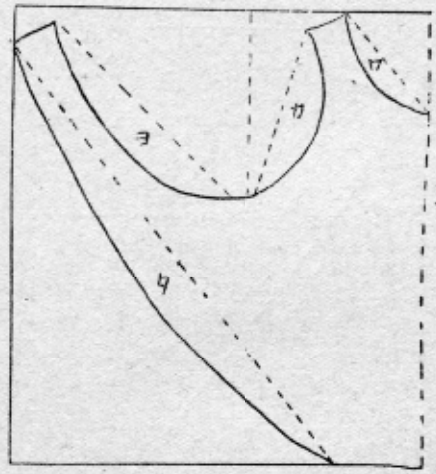
裁ち切り

斜切れの付け方

ポケットの付け方

線をえがきます。

第二圖の(2)



ポケットは口、二寸五分深さ、二寸にして底に丸みをつけて裁ち切ります。

そして廻りの裁ち目に、ぐるりと斜切を表につけ裏にまつりつけまして脇の

これが出來上りましたら線通りに裁ち切ります。

そして布を廣げますと、もうこれですつかり、出來上りの形になつて居ります。

この裁ち目の廻りに、ぐるりの斜切又は、テープを表に附けて二分位の縫代に縫ひます。返して裏でマツリつけます。

次に肩に二つづつスナップ(絲屋にあります)をつけます。

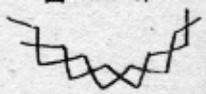
刺繍で飾たする

四五歳用

男女兒兩用になる

折り目より五分、脇の刳より一寸下げた處にポケット口の端を、あわせてマツリつけます。

第二圖



籠の手は刺繍に致します。絲はフランス刺繍の茶色がよろしいのでありますが、若しありませんければ普通の絹絲を二本にして用ひるとよろしいのであります。

第二圖の樣に二分位の針目にして十の字を斜めにしてつづければよろしいのであります。又一寸花等を刺繍したのもきれいでありますが、お洗濯した時、色が出て困りますから、まあこの位がよろしいのでせう。

◇エプロン(四五歳)

これは圖の如く簡單でありますから裁ち方、縫ひ方もやさしいので、初歩の方にも分り良い事と存じます。この飾布を時色又は藤色等に致しますと女兒によろしくありますし、水色又は黑等は男らしくなります。又細かい縞や格子縞等を用ひましたのも面白いものであります。

寸法は物から割り出す

この形をよく理解なさつて普通標準寸法を會得なされば。他の形に應用する事が出來ます。

普通出來上り寸法

寸法は皆樣に御分りのよい樣にお子樣の着物から割り出します。

裾幅は後幅の四倍自至五倍。

胸下りは衿肩明に一寸加ふ。

衿肩明は着物の衿肩より一分廣く。

後下りは五分自至一寸。

胸幅は着物の後幅より五分廣く(五寸五分か六寸位)。

出來上り圖

前

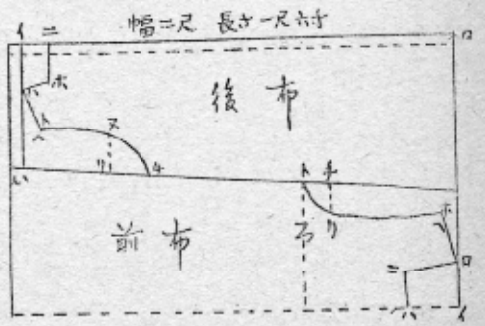
後

用布

標の付け方

用布の際

第一圖



第二圖

用布は幅二尺長さ一尺六寸とし地質はキャラコがよろしいでせう。なほ飾布を幅九寸五分長さ七寸用意します。地質はギンガム、毛朱子、ビケー等がよろしくあります。

裁ち方

幅を二つ折りに輪を手前にして置きます。

(い)は輪より五寸五分。(ろ)は右の端より五寸五分入りたる處にて輪より四寸五分。(い)は(ろ)の標に通しべラを致し前布と後布とに分けます。

次に前布の標を致します。

(ロ)は(イ)より一寸六分。(ハ)は(イ)より

二寸五分。(ニ)は(ハ)より一寸三分。(ホ)は右の端より五分。(ヘ)は(ロ)より一寸八分として圖の如く衿ぐりを致します。

後布の標

(ト)は右端より五寸五分。(チ)は(ト)より一寸五分。(リ)は(チ)より一寸三分。(ト)より(リ)を通り(ホ)に丸みをつけ脇の刻をいたします。

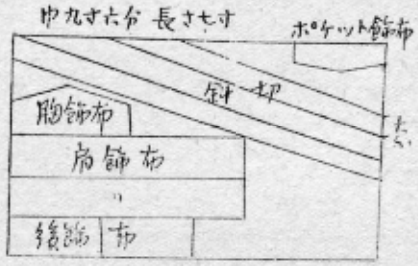
後布

(イ)は左端より五分裁ち落します。(ロ)は耳より六分となし上から下まで標を致します。(ハ)は(ロ)の點線より一寸八分。(ニ)は(イ)より一寸。(ホ)は(ロ)の點線より一寸五分。(ヘ)は(イ)線より五分。(ト)は(ハ)より一寸八分となし圖の如く後衿刻と致します(チ)は(イ)線より五寸(リ)は(チ)より一寸五分。(ヌ)は(リ)より一寸となし圖の如く脇刻をいたします。

次に第二圖の如く飾布を裁ち切ります。

飾布の裁ち切り

第二圖の一



縫方順序

縫ひ方

一、後の(ロ)の標を裾から眞直に六分に折りをつけ更にそれを出來上り四分になります樣に三つ折りにして細かく縫けます。

二、肩を前後接ぎ合せまして後に折りをつけてマツリつけて置きます。

三、前衿刻(ニ)及び後衿刻(ホ)の處に二分の切り込みを入れます。

四、胸に胸飾布をつけます。(ハ)(ニ)の處へ胸飾布を裏にあて一分五厘の深さに縫ひ表に返して飾布の端を一杯に折つて表布にマツリ附けます。

五、後飾布を胸飾布と同じ附け方にいたします。

六、肩飾布を胸飾の如く前衿刻(ニ)(ロ)後衿刻(ハ)(ホ)の處に飾布を裏よりあて。一分五厘の縫代で縫ひ表に返して飾布の端は一杯に折つてマツリ附けます。飾布の兩端は鋤形にいたします。これで衿は出來上り圖の如くになります。

七、脇を袋縫ひに致し後に折りをつけます。

八、斜切を接ぎ合せ兩脇の裁目を一分五厘に折り出來上り三分幅に鏝で折りをつけて置きます。

九、これを脇刳りの處へぐるりつと、つけて表に返しマッリつけて置きます。

十、裾を五分幅に三つ折に致し細かく縫けます。

十一、ポケットの口に飾布を裏にあてて縫ひ、表に折り返して幅を一杯に折つてマッリつけます。

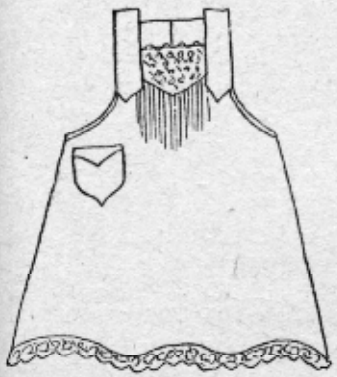
十二、ポケットの周圍を一杯に折りをつけて、身頃の右の脇下の縫代より一寸はなし、脇明より一寸下げた處をポケット上部の端にあてて附けます。後は左を上身としてスナップをつけ、それより二寸位下に、も一つ附けます。

これで全部出來上りましたから、アイロンをかけて仕上げを致します。

スナップの付け方及び仕上

七八才用洋服用

前出來上り圖



◇エプロン(七八歳)

これは七八歳の女兒の洋服用のエプロンでありますが和服の上に用ひましても、なかなか可愛いものであります。

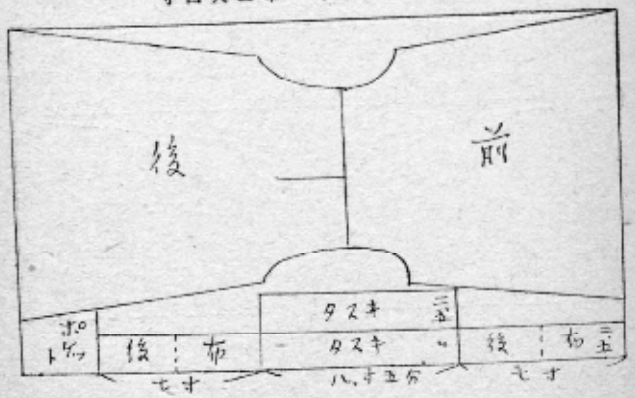
用布

巾に四寸の差を付ける

後布の腰の付け方

第三圖の(1)

長さ二尺六寸　巾二尺四寸



用布は幅二尺四寸、長さ二尺六寸入ります。地質はキャラコとし尚テップ又は斜切二尺とレースを幅一寸位長さ六尺と同幅二寸長さ六寸のを用意致します。

裁ち方

裁ち方は第三圖の(1)の如くに裁つのであります。先づ第三圖(2)の如く幅に四寸の差をつけて折り輪を手前にして置きます。

前布を一尺二寸五分。後布を一尺三寸五分。と中央に標をつけます。

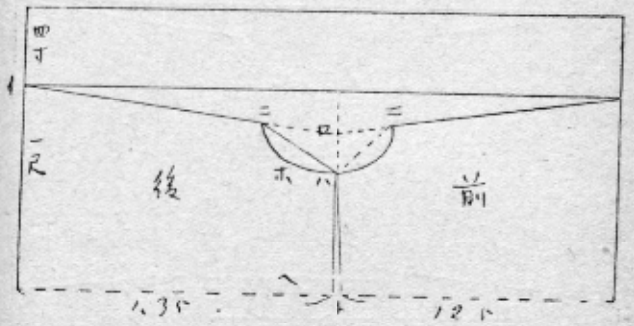
次に後布をイロハの順に標を致します。

裾の裁ち方

前布の標

第三圖の(2)

巾に四寸の巾を付けて二つに折りたるもの



(ロ)は裁目より二寸とし(イ)より(ロ)に斜線を引きます。(ハ)は(ロ)より二寸五分(ニ)は(ロ)より三寸(ホ)は(ニ)より(ハ)に斜線を引き中央で八分丸みをつけます。(ヘ)は前後の裁切線より輪の處を四寸切り込みます。ここは丁度脊になる處であります。これで後布の標がつきました。

前布は(ロ)より(ニ)迄を二寸と致し(ニ)と(ハ)に斜線を引き八分の丸みをつけます。(ト)は前後の裁ち切り線より五分として(ハ)より斜線を引きます。これですつかり標が附きましたから線の通りに裁ち切ります。

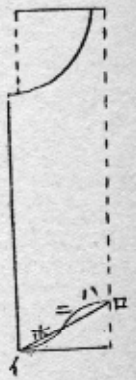
次に第三圖の(3)の如くに裾を山形に裁ち切りますが前布を縦に二つに折りまし

裾を山形に裁ち切る

縫方順序

第三圖の(3)

裾の裁ち方



て更にそれを三つに折ります丁度六つに折れましたわけであります。

この時圖の如くに脇の方は、縫ひ込み三分ばかりを出して折ります。

(ロ)は裾口より一寸五分といたし(イ)より(ロ)に斜線を引き中央(ニ)は線の上にかけ(ハ)は(ロ)と(ニ)の中央で二分のふくらみに。(ホ)も(イ)(ニ)の中央で裾の方へ二分のふくらみを入れまして圖の如く山形に標をして裁ち切ります。

次に第三圖1)の寸法通りに後布及びタスキ、ポケット等を裁ちます。

縫ひ方

一、脇縫ひを致します、此の時前布を後布より一分出して縫ひ、後に返して折伏せにしてマツリ附けます。

二、脇の刳りにぐるりとテープを淺く縫ひつけてマツリます。

三、後身の脊の切込みの處は、左の方を細く裏に三つ折りに紐けて下身に致します。右は六分に折り更にそれを出來上り四分の幅に折つて紐け、上身と致

します。下身の上に上身を四分の深さに重ねて合せます。

そして切込の下の輪の處は其儘重なりましただけ六七分の襞を取りましておさまりよく致します。

四、胸の處を兩端一寸殘して縫ひ縮め五寸七分と致し、上から鏝で縫込の分だけギャダの山をつぶして置きます。

五、後は脇から一寸離して縫ひ、それを三寸二分に縫ひ縮め、同じく鏝で山をおさへておきます。

六、胸のギャダの所に幅二寸長さ六寸のレースを兩端一分五厘出して表に重ねて縫ひます、そしてレースの方に折りをつけその上を返し縫ひに致します。

七、長さ七寸の後布を二つ折に、端を二分の深さに縫ひまして其輪になりました間に後ギャダをはさんで返し縫ひにして表に返します。

その返した口の處を二分ばかり裏に折つて表から返し縫ひに致します、尙ここを脊の方へ、鈎の手に返縫をつづけます。

八、タスキの幅を二つに折りまして細長く縫つて返します。兩方の先は劍形

致します。

九、其タスキを前はレースの端一杯に後は後布の端一杯に合せて本返し縫ひで兩方の端をつけます。この時タスキ布だけの處迄も全部返し縫ひにして置きます。

十、裾にレースをつけますこの附方は山形に出て居ります處はレースに一分位の襞を六七分置き位に取つて附けます、凹んだ處は襞をつけませんで平につけますと出來上りの格好がよいのであります。

十一、ポケットをつけましたら後にスナップを二つ附けます。これで全部出來上りました。

三四才用

用布

裁切り寸法

◇エプロン(三四歳)

用布は幅二尺四寸長一尺四寸。で地質、キャラコ、フランネル等とし、テップを一尺六寸用意します。

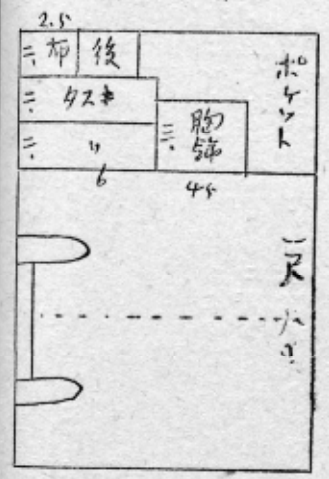
裁ち方

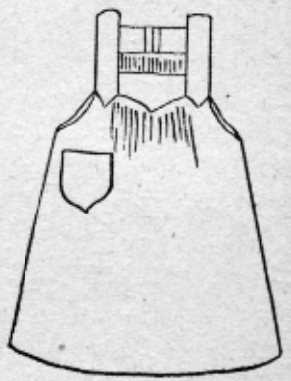
第一圖の樣に身頃の布を、一尺八寸幅に裁ち切ります。

標の付け方

第一圖

出來上り圖後





肩幅　長さ六寸　幅二寸二枚
胸布　長さ四寸五分　幅三寸
後布　長さ二寸五分　幅二寸
ポケット　口二寸五分　長さ二寸八分

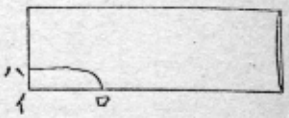
右の寸法に裁ち切ります。

次に始めに裁つた身頃の布を縦に二つに折り更に二つに折りますと、(二)圖に示す樣に四つに折れたのであります。それを(二)圖の樣に下に平に置き、手前側の輪の二枚重なつてゐる左手の角(イ)より四寸と(ロ)に標します。

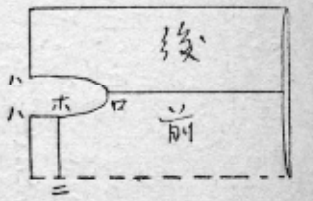
(ハ)は(イ)より一寸(イ)と(ロ)の間の四分

標の付け方

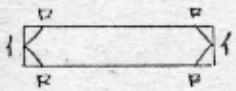
第二圖



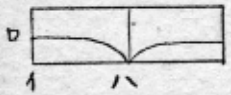
第三圖



第四圖



第五圖



の一だけ(ロ)より上つた處迄は(ハ)の標を眞直に引き下げ、それより(ロ)までは圖に示す如く丸くして置きます。

そして(ハ)より(ロ)迄四枚一所に曲線通りに裁ち切り、それを擴げますと、第三圖のやうになります。

次に第三圖のやうに輪を手前に置きます。(二)を二寸(ホ)を二寸として(ニ)より(ホ)迄を眞直に裁ち切ります。

肩布は縦二つ折りにして、輪でない方に縫代一分五厘と標し、兩端は(イ)より(ロ)迄を四分として劍形に標して裁ち切ります。

胸布は縦に二つに折り更に二つに

縫方

折り、四枚重なつてゐる端の角の(イ)の標から五分と(ロ)に標をつけ(ロ)の標を一寸位の間は眞直に致し、それより先にて內側に丸味を付けて(ハ)の角へと線を引き、(ロ)より(ハ)迄を裁ち切りそれを擴げますと、第五圖の樣になります。是で全部裁てました。

縫方は七八歳用のとほゞ同じですが、次に一通り申上げませう。先づ最初に脇の刳りにテープをつけます。次に後布の背筋を左右とも四分巾に三つ折りにして紩けます。次に胸の處の兩端を一寸位殘して、飾布の巾だけに縫ひ縮め、後も脇から一寸位離してそれを縫ひ縮めまして、どちらも上から鍔で縫込みの分だけギヤダの山をつぶしておきます。次に胸飾布を二つに折つて兩端を縫ひまして、表に返し胸のギヤダの所に縫ひ付け、裏にてマツリ紩に致します。次に後布も前飾布と同樣に付けます。それからタスキを劍形に縫つて七八歳用のと同樣に本返し縫ひにして付けます。次に裾を出來上り五分巾に三つ折にして細かく紩けます。それからポケットをつけて、後にスナヲブを付けますと出來上るのであります。

ギヤダ付き前掛

用布

第三講　割烹前掛の仕立方

割烹前掛とは厨房の仕事をする時に掛けるもので、お召物の汚れを防ぐと同時に、身のまはりのバサ〳〵せぬやうに纏ふのであります。そして白い清潔な前掛で活動することは如何にも愉快にまた物が美味やうに感ぜられます。その形にも色々ありますがまづ簡單なものから始めませう。

前掛胸來上り圖（一）

用布はキャラコ、天竺木綿、又は格子縞等がよろしくありますが、單衣物の古いの等を利用なさるのも結構です。

一、ギヤダ付前掛

用布　幅二尺四寸　長さ二尺一寸

着物の汚れを防ぐ爲に普通の前掛より幅を廣くし、丈も長くして帶の上に掛ける樣にしてあります。

丈は其人の丈けによつて長くも短かくも自由に致します。

裁ち方

始め、布の端から一寸五分のギヤダ布を三本取ります。

次に二寸幅の紐布を三本取ります。この内の一本は、長さの$\frac{1}{3}$だけギヤダに廻します。

残りの布が身頃になるのでありますから第二圖の樣に輪を手前にして置きます。

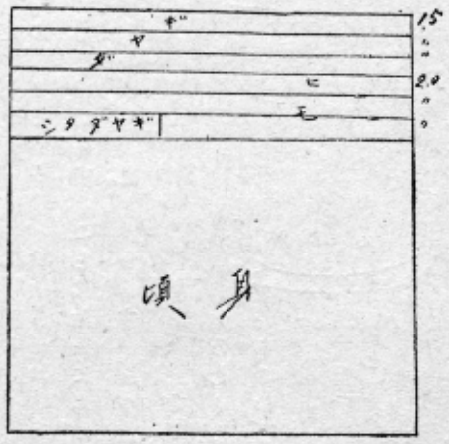
(イ)輪の左から五分。

(ロ)裁目の方より五分として(ロ)から

布取り

標付け方

第一圖



(イ)に斜線を引きます。

(ハ)裁目より三寸。

裁切り

(ニ)裁目より三寸。

(ホ)角の處より一寸二分入つた處に標をして(ハ)(ホ)(ニ)と丸みをつけます。

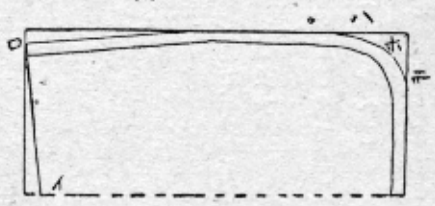
次に丈の中央から(ロ)に斜線を引きます。

右の標が出來ましたら、圖の樣にその標より六分内側にグルリと標をして標通りに裁ち切ります。

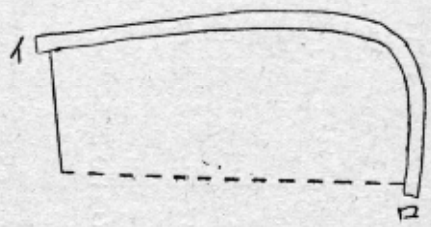
この六分幅の裁ち落し布は、みかへし布にいたします。

このみかへし布を身頃の端の處へ重ねますと第三圖の樣に(イ)(ロ)の處へ端が出ますから(イ)の方はそのままそろへて切ります。(ロ)の方は接ぎ代だけ殘して裁ち切ります。

第二圖



第三圖



縫方

縫ひ方

(一)二本半の紐布をしつかりと接ぎ合せてから紩けます。

(二)ギャダ布を三本半接ぎ合せます。次に片端を一分位の巾に三つ折りにして紩けます。

(三)今紩けた反對の端を、極淺く縫つて、この長いギャダ布を身頃の廻りの丈けだけに縮めます。

(四)身頃の中央とギャダの中央とを合して待ち針を打ちます、そして何處も同じ樣に、ギャダを平にして待針を細かく打ちます。

(五)其上にみかへし布の端を一杯にそろへて待針を打ち直しまして、一分五厘の縫ひ代で半返し縫ひに致します。全部縫へましたら。

(六)みかへしの布の方から、すつかり鏝をあてゝ、きせをかけない樣に折りをして、みかへし幅三分として折り、表にマツリ附けます。

(七)これで紐を附けるのですが、出來上りの圖の樣に、身頃に四五分の襞を二つ取りまして紐を附けます。

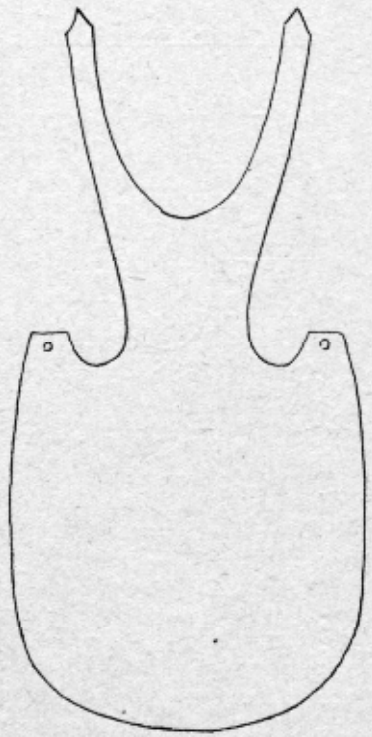
袖無し前掛

用布

二、袖無の前掛

この割烹前掛は袖のない簡單なものであります。脇の刳の處に袖をはさんで後はタスキになります。

出來上り圖(二)



用布　幅二尺　長さ三尺。

裁ち方

布を縦に二つに折つて輪を手前にして置き、イロハの順に標をつけます。

標付け

(イ)左の端を(イ)とします。

(ロ)(イ)より四寸五分。

(ハ)(イ)より四寸として(ロ)より(ハ)に斜線を引く。
(ニ)(ロ)(ハ)の中央で一寸二分、ふくらみを入れる、これが頸廻りです。
(ホ)(ハ)より二寸。

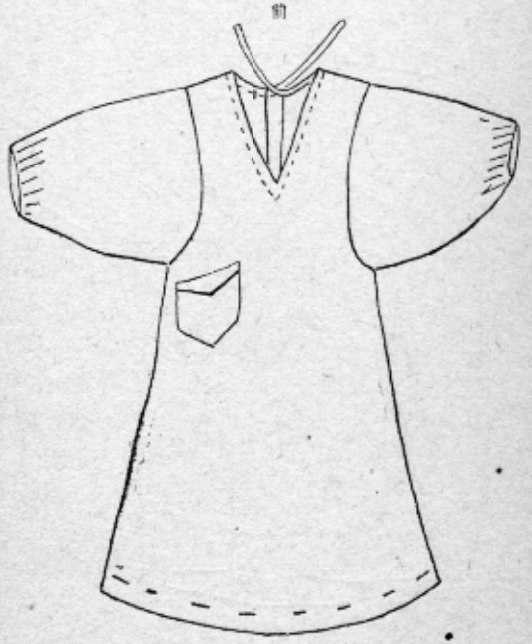
裁ち方

(ヘ)左端より一尺。
(ト)(ロ)より二寸下つた處で輪より四寸。
(チ)裁ち目より五分入つた處で左の端より八寸五分。

ち切り

出來上り圖（三）

前



(リ)(チ)より二寸、(ホ)(ト)(ヘ)(リ)(チ)と圖の通り線を引きます。

(チ)より三寸ばかりの處で斜めに線を引きます。

これが脇の刳りであります。

裾は(イ)一寸五分、(ロ)五寸として丸みをつけます。

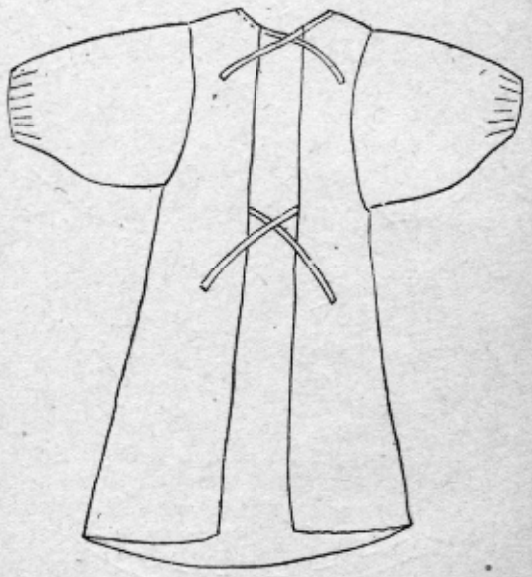
タスキは二寸幅を斜めに圖の樣に九寸取ります。

これで線の通りに裁ち切ります。

縫方

出來上り圖（三）

後



縫ひ方

一、(ホ)(ハ)の處へ、タスキ布を接ぎます。

二、衿廻りを一分五厘位に三つ折りにして細かく紩けます。

三、脇の刻を矢張り三つ折りにして紩けます、タスキの兩端も同じく紩けます。

四、タスキの端と(チ)(リ)の中央とにスナップをつけます。

着用した時、後はタスキになつて脇の下でスナップで止めるのであります。

袖付き割烹着

用布

裁ち方

標付け

三、袖付き割烹着

これは(二)の割烹前掛よりも復雜して居りまして身幅も廣く後の方まで延つて居り又袖も附いて居りますので、着物の汚れを、防ぐばかりでなく身體がキチンと致しますし尙見た格好もよろしいのであります。

用布　幅二尺四寸、長さ五尺二寸。

地質　キャラコ、天竺木綿、又は格子縞等がよろしいのであります。若し單衣物の、古いのを利用します時は、木綿巾を二布半又は三布接ぎ合せて圖の樣に裁ちます。

裁ち方

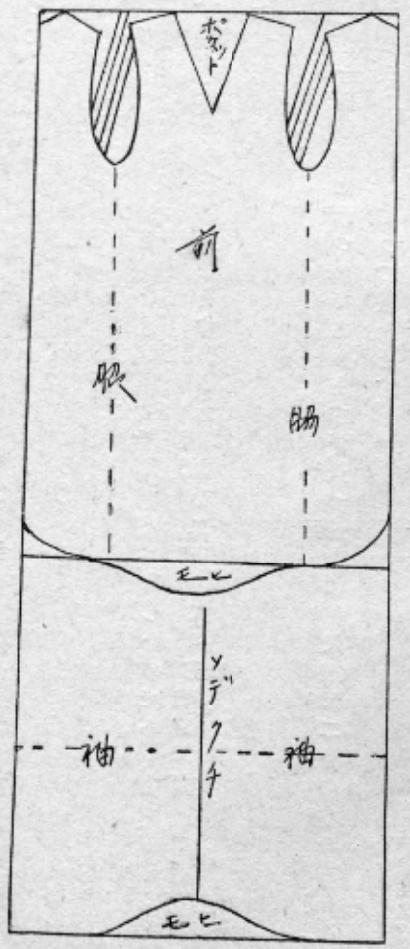
第一圖の樣に裁つのでありますが、先づ始めに總尺五尺二寸の中から、袖布として、二尺裁ち切つて置きます。

次に三尺二寸の布を第二圖の樣に、輪を手前にして置き、イロハの順に標附けを致します。

(イ)輪の左の端に(イ)と標します。

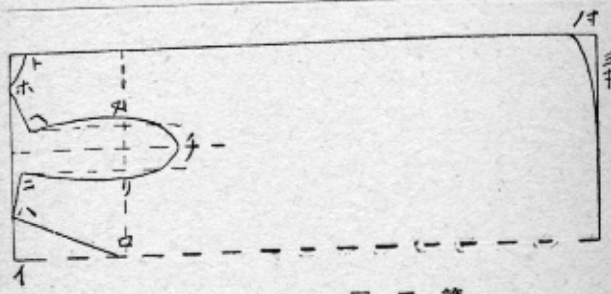
(ロ)(イ)より六寸五分。
(ハ)(イ)より二寸五分(ハ)より(ロ)に斜線を引きます。

第一圖　割烹着裁方總合圖



(ニ)裁目より五分へ入つた處で(ハ)より三寸として(ハ)に斜線を引きます。
(ホ)左上の端より一寸五分。

袖裁ち方



(ヘ)左裁ち目より一寸入つた處で(ホ)より三寸として、斜線を引きます。
(ト)左裁目より一寸として(ホ)より少し丸みをつけて標します。

第二圖　身頃の裁ち方

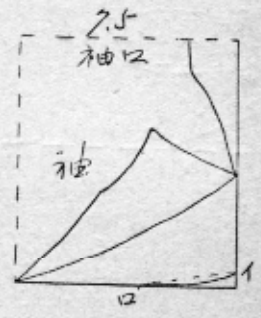
(チ)(ニ)と(ヘ)の中央で裁目より九寸。
(リ)手前の輪より(ニ)を計り眞直に點線を引きます。
(ヌ)向ふの端より(ヘ)を計り同じく點線を引きます。
(チ)より三寸よつた處で(リ)及(ヌ)に二分のふくらみを入れて圖の樣に丸くします。
次に裾を圖の樣に三寸の處から丸みをつけて、一寸の切り上げをつけます。

袖の裁ち方

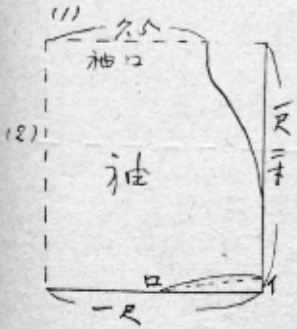
袖は巾二尺四寸長さ二尺の布を縱に二つに折り、更に横に二つに折まして第三圖(二)の樣に、左及向ふ

袖附に丸みをつけること

第三圖の(一)



第三圖の(二)



袖の裁ち方

注意の時る折を袖
すましに輪てつ折な方の(一)に次　しに輪てつ折に先な方の(1)め初

側を輪にして置き、袖口七寸五分と標し、二寸ばかり眞直にして、それから丸みをつけて圖の樣にハマグリ形にします。

次に袖附は身頃の方が丸く剡つてある處に、眞直なものを附けるのは、誠に附けにくいものでありますから。

第三圖(二)の樣に(イ)を端より五分と標し(ロ)は幅の中央として(イ)より(ロ)に斜線を引き、中央で外側に二分のふくらみをつけて標をして上の二枚だけ裁ち切ります。

次にこの裁ち切つた二枚を上に、よけて下の二枚には反對に前の斜線より、內側に二分の丸みをつけて第三圖(一)のやうに標しをして裁ち切ります。

つまり前袖は袖附の處がダブダブしない樣に二分切り込み、後袖附は手の運動に、ともなひ前に引かれるので二分ふくらみを附けて、餘裕を取つてあるのです。

これで大體裁てました。

若し肥つた人でしたら、胸下り(ロ)を七寸とし又(ト)より(ホ)の部分を一寸にして、袖の剡りを大きく致しますと着まいのであります。

ポケット　衿の剡り落しから取ります。

紐　出來上り幅三四分、長さ五六寸として袖の裁ち落しから取ります。

斜切　これは衿の廻りに力布として用ひるのです。

袖剡りの裁ち落しを幅六分として斜に何本も取り、接ぎ合せて衿の廻りの丈だけにします、そしてこれを兩端から折つて三分の幅にして鏝をかけて置きます、これで全部裁ち終へました。

縫ひ方

縫方

一、すべて縫ひ代は極く淺くして、細かく縫ひまして、折り伏せにして、マツリ付けます。

二、袖下を縫ひます。縫ひます時、後袖の方を一分先へ出て合せて縫ひます。そして前袖の方に折り伏せ(三つ折の事)にしてマツリます。

三、身頃の肩つまり(ニ)(ハ)と(ホ)(ヘ)とを合せて縫ひ、後身の方に折つて、マツリ付けます。

四、衿廻りは、グルリと斜切をつけます。

附方は前に折つて鑢をかけて置きました斜布を衿廻りの表にあてて縫ひ、裏に返して、マツリます。

五、次に袖をつけます。折りは身頃の方に折り伏せにしてマツリます。

六、裾を一寸折り、出來上巾八分に絎けます。

七、袖口を、七分折り出來上り巾五分に絎けます、絎け終りを一寸ばかり殘しておき、そこからゴム又は紐を通します。

八、紐を三四分の幅で六七寸の長さに絎けまして、衿の後にくけ、それより一尺

斜切の付け方

衿刳り

ばかり下にも二本つけます。

九、ポケットは隨意の形にして袖附より一寸下に、脇の折目より五分前身の方によつた處をポケットの上部の端に合せてマツリつけます。

これで全部出來上りましたから、アイロンをかけて仕上を致します。

衿廻りに斜布を用ひました處をレース又は格子縞の斜布等にて飾りにするも結構です。

四、衿刳りの裁ち方二種

第三の割烹着の衿は出來上りの圖の樣に劍形になつて居りますが、これは丸衿にも角衿にも自由に裁つ事が出來ます。

丸顏の人は劍形の衿になさると調和がよろしくありますし又面長の人は丸衿になさると愛らしく見えるものです。

角形衿

第四圖の樣に裁ちます。

(イ)鞠の左端に(イ)と標します。

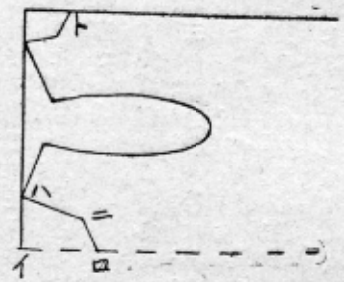
角形衿

(ロ)(オ)より四寸五分。
(ハ)(イ)より二寸五分。
(ニ)(ロ)より五分上つた處へ(ロ)より二寸と標し圖の樣に(ハ)(ニ)(ロ)を斜線を引きます。
(ト)左上の端より一寸五分下げ、圖の樣な形に致します、次に線通りに裁切ります。

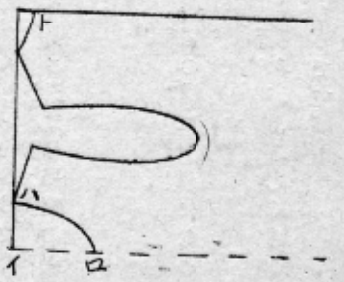
丸形衿

第五圖の樣に裁ちます。
(イ)輪の左端に(イ)と標します、(ロ)(イ)より四寸(ハ)(イ)より二寸五分として圖の樣に丸くします、(ト)左端より七分として丸みを掛けます。

第四圖 角形衿裁方



第五圖 丸形衿裁方



檔入割烹着

次に線の通りに裁ち切ります。

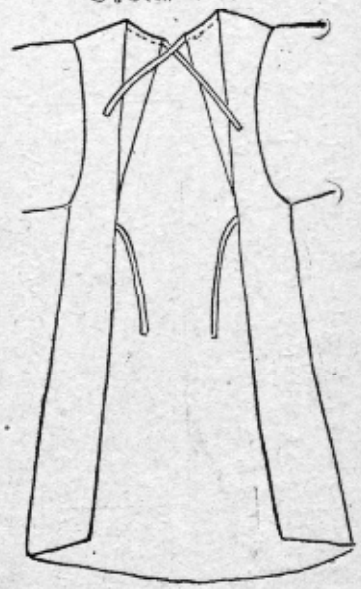
五、檔入割烹着

第六圖は、二尺幅にて作れる割烹着、二尺幅でお裁ちになりましても、別に身頃が狹くて困るといふ事はありません、少し細つた方は、此二尺幅で結構であります。天竺木綿や格子縞等は二尺幅の物が多くあります。

後の衿及脊の處は、圖の樣に、三角に細長い檔を入るのであります。

第二圖の(ホ)(ト)の部分を取りませんで、向の端の角を(ホ)と致します。
(ホ)(ト)に當る分を檔布から取るのです。

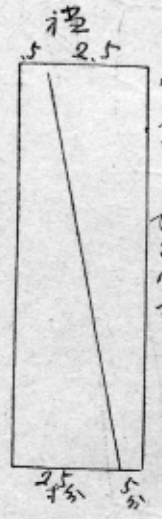
第六圖 二尺巾にて作れる檔



単衣物の利用

縞布、三寸巾で長さ七八寸の布を圖の様に切つて出來上りの圖の様に、三角の角を下にしてつけますればよろしいのであります。

第七圖



以上に述べましたのはいづれも前だけのものでありますが、次に述べますのは、體の後から裾までも全部包まれて、衣服が汚れず誠に働きよく、そしてモシお子様にお乳をお上げになるにも便利であります。

縫方は古い單衣を利用すると分りよくあります。先づ單衣の袖丈を好みにつめ、袖口にゴムを通します。次に右脇の適當な處を四五寸あけて内側にポケットを付けて口を絎けておきます。身丈は對丈に致します。衿と衽とは取りまして是をはぎ合せて衿とし、紐は付けずに、前幅を一杯として長襦袢の様に衿を下まで付け衿幅は一寸位の幅に衿けておき、紐は手頃のところに付け其中間にホックを一つ付けます。是で出來上ります。

着物の損傷し手入の仕様で體裁よくなる

繼ぎ接ぎは練習して手ぎわよくするのが要領

第四講　繼ぎ接ぎの仕方

毎日着て居ります着物は、長い中には自然にすれて地が薄くなつたり、傷んだり、又は燒穴が出來ましたり、或は思はぬ鈎裂をこしらへたり致します、それを少し手を入れて體裁よく繕つて着るといふ美しい心掛けを皆様に持つて頂きたいと存じます、少しの手入で着物はずいぶん長く着られるものであります。

凡て繼ぎ物や接ぎ物の要領は、其の繼ぎ目や接ぎ目がわからない様に、手ぎわよくするといふ事が肝心でありますが、それには練習が必要であります、だが別段練習を致しませんでも、忠實にして居ります中には上達致しますから先づ丁寧にするといふ心掛けでなさればよろしいのであります。

次に地質を綿布と絹布と毛織物とに別けまして述べます。

◇綿布の繼ぎ接ぎの仕方

一、針　地質は綿布でも針は絹針を用ひます。

一、絲　繼ぎ絲と申て極く細くて割合に强い絲を賣つて居りますから、それを用ひます、色は地質と同じものを使ひます。

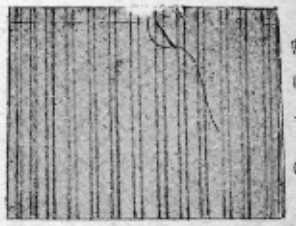
一、片返し接ぎ　（綿布片返し接ぎ）

これは普通の接ぎ方であります、接ぎ合すべき布を二枚合せて縫ひましてこれを二枚一處に一方へ折返したものであります。

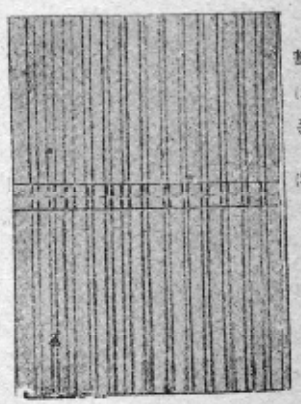
先づ接ぎ合はすべき二枚の布の縞目をよく合はせます模樣物ならば、其模樣をなるべく合せる樣に致します。そして布目も曲りません樣に注意いたします。これが二枚合ひましたなら、二枚の布が動きません樣に假に、しつけをかけて、おさへて置きます。そして細かい針目で二枚を接ぎ合せます。そして、きせを餘りかけません樣に一方へ折りつけまして、其絲で隱し縫をかけて裏から烙鏝をかけて仕上げます。

二、割り接ぎ　（綿布割り接ぎ）

これは、接ぎ目を平らに致す時、又丁寧に接ぎます場合に、この仕方に致します。二枚の布を揃へて縫ひまして、縫ひ目を兩方にぴつたりと割るのであり



第一圖　割はぎ（1）



第二圖　割はぎ（2）

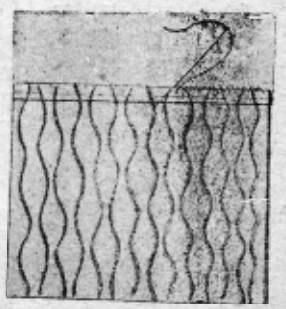
ますから、絲は細くて而かも强いものを用ひます。

先づ片返し接ぎと同じ樣に、接ぐべき二枚の布の縞目及布目を正しく合せて假に縫をかけて二枚が動かないやうにおさへて置きます。そして第一圖の樣に細かく縫ひます。次に第二圖の樣に縫目を兩方へぴつたりと開きます、其開いた縫代の端をかくし縫でおさへて置きまして、裏から烙鏝をかけます。

三、掛け接ぎ　（綿布掛け接ぎ）

先づ接ぐべき二枚の布を、別々に縫代の處を布目を通して眞直に裏へ折りつけます、この折りましたものを二枚表を中にして合せます。この時は第三

第三圖



掛はぎ

圖の樣に縫代丈け折つた分は前と後に行きまして表は中に合さる樣にするのでありますから御注意下さい。

次に二枚の縞目と布目とを合せて動かぬ樣にし鞍でおさへて置きます、そしてこの二枚の折り山を繊絲二本位をすくつて手前から向ふへ、又は向ふから手前に針を出してマツリ絎けをするやうな針使ひで抄ひ縫ひに致します。この接ぎ方は手間が取れますが面倒を見てなさると誠にキチンとして出來上りがきれいであります。全部縫へましたら鞍を取り布を寛げまして、縫ひ目を少し濕らして裏から烙鏝をかけて仕上げます。

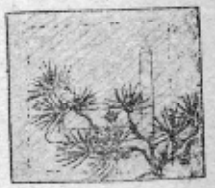
四、穴縫ぎ

圓く傷んで居るならば、圓形に又鈎裂の場合はその型に致します。

圓型にはその周圍に切り込みを入れて、圓く巻込むよゝ裏へ縫ひ代を折り込し

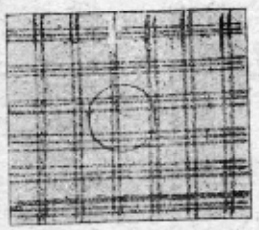
第四圖

表

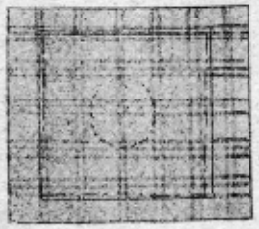


裏

第五圖



表



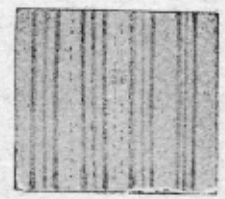
裏

ます、そして其の穴よりも大きい共切を裏にあてます、其のあて切れの周圍を鞍でおさへて置きます、この時矢張縞目と布目とを氣をつけて合せます。次ぎに表から布が平にはまる樣に注意してマツリ絎けの樣な針使ひで布を抄つて接ぎ合せます、これが出來上りましたら裏返して裏の當て切れの周圍を表に針目の目立たぬ樣に、かくし鞍でおさへて置きます、そして烙鏝をかけますと出來上ります。

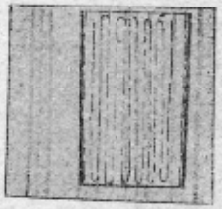
五、色紙縫ぎ

布に穴が明きませんでも地の弱つてゐる時卽ち薄すぎれがしてぬけそうになつてゐる處へは、色紙繼ぎを致します。傷んでゐる部分よりも少大きい共切れか、又は外の布を當てて其の廻りを色紙絲で當てた布の端より一針先から大針小針で圓の樣に繼いでゆきます、これは丁寧になさらないと見苦しくなります。

第六圖



表



裏

しきしつぎ

同上

六、刺し繼ぎ

地質が少し傷んだ時色紙繼ぎする程でもありません時に、刺し繼ぎにしておきます。絲は解絲か又は共色の細い絲、又は色紙絲で織地の通り細かく刺しておく仕方であります。

◇絹布の繼ぎ接ぎの仕方

絹布の繕ひ方も又毛織の中のメリンス等の地質の薄い物は、大體木綿類と繕ひ方は同じ樣でありますが、多少違つて居りますから、次に述べる事に致します。中にも稀にしか必要がありませんで、しかも大切な繼ぎ方もありますラシヤの繼ぎ方、縮緬類の繼ぎ方等は其の一つの例であります。やりやうでは少しも目だたぬ樣にも出來れば、又見苦しくもなるものですからなかなか手際を要します。

繼ぎ接ぎ用には解し絲と申て織絲の解たものを用ひます。これは目立たぬのでよろしいのでありますが、弱いので使ひにくいから共色の菅絲を使ふか、時には生絲を用ひ、物に依つては普通の縫絲を使つても差し支へないものもあります。

針は掛け接ぎ用の細いもの卽ちメリケンの十二番位が適當であります。

一、片返し接ぎ

綿布の場合と大體同じであります、絹布は一體に地薄ですから大ていの場合に、この仕方で間に合ひます。

仕方は良く布目や縞目を合せて、鞍で二枚の布を押へておきましてから縫ひ合せます、其の針目はなるべく細かくいたします。

つぎ糸の種類

絹布片返し接ぎ

綿布割接ぎ

二、割接ぎ

綿布の場合と大差がありませんが其の仕上げ方が違ひます、接ぎ合せたならば絲はゆるい位にしておきます、絲がつれて居りますと布が縮んで、見苦しくなります。其仕上げ方は縫ひ目を割りましたその縫代に、姫糊か續飯の淡くしたものを針の先につけて裏から細く接ぎ目の邊にひいて、烙鏝をかけてはりつけます。續飯といふのは御飯を練つてこしらへた糊のことであります。

綿布掛け接ぎ

三、掛け接ぎ

縫ひ方は綿布の場合に同じであります、卽ち接ぐべき二枚の縫代のところから裏へ折ります。若し折りの附きがたいものは烙鏝で折りつけます。そして表と表と合せて二枚の布の縞目や布目をよく揃へ躾で押へて動かぬやうに致します。

先づ織り絲二三本を手前から向へ針を出して抄ひ、マツリ紬けをするやうな針使ひで縫ます。全部すみましたら躾を取つて縫目を割り、綿布の割り接ぎの仕上げの樣に姫糊の淡くしたのか、續飯の淡くしましたものを針尖につけて裏から接ぎ目につけて裏から烙鏝をかけます。

縮緬の掛け接ぎ

四、縮緬類の掛け接ぎ

縮緬類は特別でありまして、等しく掛け接ぎといつてもその方法が違ひます。先縞目や布目に注意して接ぎ代を折ります、そして西の内紙か又は厚い美濃紙の類を縦に五六分(二糎)の幅に裁ち切つて、これを接ぎ代の處へ裏から當てて接ぎ代と一諸に折るのであります躾をかけて二枚ともこの樣にします、若しこの樣にしませんと縮緬類は伸び縮みのはげしいものですからその接ぎ目の處ばかり、伸びて見苦しくなります。そして兩方の折り山を正しく合せて、躾をかけて經絲凡そ二本おき位に緯絲一本を抄つて、五六針進みましたなら、一針づつスカラ掛けにして全體出來上りましたら、紙を取りすてて割り接ぎの樣に姫糊の淡くしたものを縫代にひいて、烙鏝をかけて仕上げを致します。

組布接ぎ

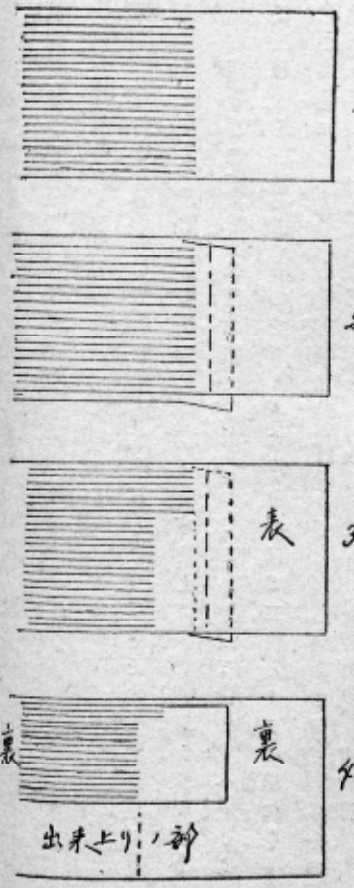
五、織り接ぎ

この接ぎ方は稀にしか用ひません、極く目立つ場所を接ぐ時とか、餘り他の接ぎ方では目立つていけない時にはこの仕方に致します。

この接ぎ方のよい處は、裏に接ぎ目の出ない事と表の出來上りの美しい事とであります、然しこの接ぎ方は、なかなか練習も入りますので、大ていの場合には他の接ぎ方で間に合せて、めつたに用ひられませんが知つておきますと

第七圖

織り接ぎの圖



重寶する場合も多い事と存じます。

先づ一方の布の端を第一圖の樣に三寸位解して經絲だけに致します。

次に第二圖の樣に接ぐべき二枚の布を縞目や布目をよく合せて三分位重ねて鋏をかけます。そして解した絲を一本づつ針に通して他方の布の緯絲を抄つて織地の通りに五六分刺して行つて、絲を引き締めてよく接ぎ目を合せます。こうして全體すみましたら絲や布の餘りをきれいに切りすてて烙鏝をかけて仕上げます。

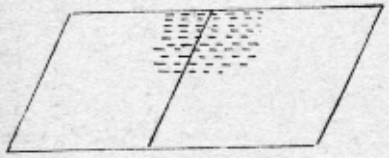
六、寄せ接ぎ

この接ぎ方も、餘り度々用ふる樣な事はありませんけれども、縮緬物の衿、肩明等はとかく裂ける場合が多いものですし、又大人物を子供物に仕立直すとかいふ場合にはこの仕方によらねばなりません。

其の仕方はまづ接ぎ目の解れはきれいに切り取つておいて、布目と縞目とはよく注意して裁ち目を突き合せます

第八圖

寄せ接ぎの圖



絹布色紙繼ぎ

そして兩方の裏から三四分程入つた處まで織地を刺して接ぎ合せます、最後に烙鏝で仕上げます。

七、色紙繼ぎ

繼ぎ絲には解し絲か又は共色の割り絲を使ひ、針は繼ぎ針を用ひます。仕方は綿布の場合と大體は同じでありますが、その針目は二目落しか三目落しにして極く細かく、そしてもつと丁寧にする事が綿布の場合と違つて居ります。

絹布刺し繼ぎ

八、刺し繼ぎ

これは綿布と全く同じであります、地質が弱つても別に色紙繼ぎにする程の事も無い時には、布を當てないで色紙繼ぎと同じやうにさしておきます。

絹布穴繼ぎ

九、穴繼ぎ

損じた場所を圓形か方形に切りとりまして、圓形でしたら、そのまはりに、四角でしたらその四角に切り込みを入れて裏へ縫代を折り返して、烙鏝をかけます、共切を裏

第九圖

絹布穴繼ぎ裏

毛織物には解糸は使へないこと

毛織の突き合せ接ぎ

から當てまして、よく縫目や布目を合せて續で押へておいて細かくマツリつけます、全部マツリつけて繼いだ布のまわりにも、切り込みを入れて圓のやうに開きます、つまり縫代を割つてしまふのであります、そして、縫目に温りをおいて烙鏝をかけて仕上げます。

◇毛織物の繼ぎ接ぎの仕方

メリンスの樣な地の薄いものは綿布の仕方でも、よろしいのであります。ここでは主として地の厚いラシャ類について述べます。此頃は洋服が大變に多く用ひられますから、どなたもラシャ類の繕ひ方は一通り心得ておかなければなりません。

針及絲の注意は絹布の場合に述べたと同じであります、但し解絲は使ひません。

一、突き合せ接ぎ

厚地の毛織物の接ぎ方は、全部この方法であるといつてもよい位大切であります、其仕方はまづ接ぐべき布の兩端を平に切り揃へ、毛並縞目等によく注

意して裁目を突き合せます。そして兩方とも五六分の深さに織地の中を抄つて、接ぎ目のところばかり表にかけて細かく刺します。最後に烙鏝をかけ刷毛で毛並を整へて仕上げを致します。

毛織の穴繼ぎ

二、穴繼ぎ

先づ繼ぐべき穴を圓型に綺麗にきりとります、そしてその穴にきつちりはまる樣に、共切れを同じ形にきります。その穴にはめこんで、よく裁目をそろへ、勿論縞目や布目をよく合せて動かぬ樣にして突き合せ接ぎと、同じ仕方でつぎます。

こうすると丈夫でありますが、なれませんと見苦しくなりますから、裏から淡い糊をつけた他の布をあてて、熱した烙鏝をかけて、はりつけてもよろしいのであります。

子供の着物は揚げの仕方一つで

◇子供物着物の揚げの仕方

子供の着物は腰揚又は肩揚げの格好がなかなかむづかしいものであります。この揚げの仕方一つで、いかにも可愛らしくも見え又、ダラシない形にも

地質斗の注意は一番狂ひの原因

布の耳のゆるんで居るもの

見えるものであります。

肩揚は脊縫と袖付の中央を揚の山に致します、腰揚の方は、揚の山を境にして四分、六分、の割合になる樣に致します。

つまり揚の山より上を着丈の六割とし、揚の山より下を着丈の四割と致します。この割合に致しますと、たとへ揚の非常に多い場合でも、又極少ない場合にも、同じ樣に格好よくゆきます。

◇地質斗の仕方

新しい反物を仕立てます場合には、それぞれ布の整理をする事が肝要であります、若しこれを怠りまして、良い加減にして仕立ますと非常に仕立にくいばかりでなく仕上も悪くありますし、地の目も曲つて居りますからいけません、地質によりましては紐絆などの如く、非常に耳のたるんで居るのもありますし又非常に耳のつつてゐるものなどもあります。

一耳のゆるんで居るものは、其のゆるんで居る處に霧を吹きます。そして卷棒なり卷板なりに卷いて置きますと宜いのであります。

耳のつつて居るもの

帶芯の地殺斗

布を引伸ばすには斜に

縫目のきせは淺く

二、耳のつつてゐるものはつつてゐる部分を延ばす樣にしながら、布一面にアイロンをかけますとよいのであります。こうしても尙耳のつつてゐる樣な場合には、耳に切り込みを入れる事もありますが、然しこの切込みはなるべくなさらないで整へた方がよいのであります。

ついでに帶芯にする三河木綿について申上ませう。

三、河木綿は新しいものを其儘用ひますと、後に非常につまりますから、初めにすつかり霧を吹いて少し間をおいて後、火熨斗をかけます。

三、布を引伸ばすには、布目のままに眞直ぐに鏝をかけると却つて縮みますから、布を斜めに引張つて鏝をかけると、どんなにでも伸びます。其故羽織の前下りの樣に布が斜になつて居るところに鏝をかけるときは、充分注意して靜かに輕くかけないとすぐに布が伸びてしまひます。

尙終りにモウ一つ注意を申ませう。すべて縫目のきせはなるべく淺くしないと狂ひがでます。殊に袖付は決して三厘以上かけてはなりません。但し羽織の衿は一分以上かけます。

袋物

袋物の種類

第五講　袋物のこさへ方

名刺入、楊子入、巾着、葵口、紙入、財布、鏡入、手提袋、箱迫など其他品物を入れる爲に、布類や、皮類や、紙などの加工したもので拵へた袋類を袋物と申します。

袋物は人として缺く事の出來ぬ實用品でございます。又手提などは實用と裝飾とを兼ねた物でありまして、人と生れて袋物を持たぬものは無いのでございませう。先づ赤ちやんには守巾着を腰に下げてやります。ヨチヨチと歩む位になり、四五歳頃になりますと、女の兒などは人形の付いた袋や、口金などの附いた愛らしい手提を玩具の樣に持つて、嬉しがつて居ます。小學校に通ふ頃になりますと、お金を入れる物が必要になりますから、葵口に紐をつけて、首又は帶に下げるなどして、落さぬ樣に持たせます。次第に大きくなりますと、手提も葵口も鏡入も、と云つた樣に、一人で三つも持つてゐる人もあります。又老人はお寺詣りに、珠數の入つた袋を下げるなど、老人も子供も男も女も、袋物を持たぬ人はありません。實に需要の多い物でございます。

趣味と經濟

商店にあるものを見ますと、之を拵へます事は甚だ困難なやうに思ひますが、其拵へる方法を知れば、誰にでも出來ます。そして大きさや形などは、自分の好みにまかせて、色々工夫して拵へることが出來ますから。之を習ひ覺へて、一家の人々の必要な袋物は、有り合せの布で、拵へる樣に致しますと、一家の經濟の上に於てもよろしうございます。又丈夫で保ちも長いし其上趣味としても高尚で、面白い物でございます。

袋物の用具

裁板

裁ち庖丁

尺度

長定木

◇袋物の用具

一、裁板　大さは隨意でございますが、幅九寸、丈一尺三寸、厚さ一寸以上の朴の木で作つたものがよろしうございます。其用途は、裁ち方、貼り方、仕上げなどを總てこの板の上で致します。

二、裁ち庖丁　一名角庖丁ともいひ、型紙、用布、其他總ての裁物の時用ひます。

三、尺度　鯨尺、曲尺、メートル尺等のうち何でも差支へはありませんが、之れまでの習慣上曲尺を用ひて說明致します。

四、長定木　赤樫で作りました幅一寸三分長さ一尺三寸厚さ二分位の細長

糊板

糊筥

鏝

目打錐

大黑槌

槌類

吹切り

い物で物を裁つ時の定木に致します。

五、糊板　糊を練る臺に用ひますので、寸法や木質は隨意でございます。

六、糊筥　糊を練つたり、用布や型紙其他の物に糊をつける時に用るもので、枯た竹で作つたものが宜しうございます。

七、鏝　型紙を用布に貼りつけた時や、縫目を折つた時に用ひまして鋼鐵の兩磨きが最も宜しうございます。

八、目打錐　大小二種ございますが何れも端まで丸く尖つた細い錐で線を引く時折り返しの時角を正す時、縫目を揃へて仕上げをする時、また型紙に穴を明ける時、小馳を打つ時、用布に穴を明ける時等に使用致します。

九、大黑槌　樫の木で作つた小さい槌で、縫ひ目の折をしつかりとつける時や、ホックを打つ時に用ひます。

一〇、鐵槌　一名とんかちともいひ鐵で作つた小さい槌で、小馳其他の金具を打つて平にする時に使用致します。

一一、喰切り　小さい釘抜に刃をつけた樣な形の物で、小馳の足等の金を切

る時に用ひます。

一二、輕便ホック打　赤樫で作つた丸棒の尖端を丸く凹めた物で、其の棒の長さは三寸五分、丸さは直徑六分で凹の形は皿形に凹んだ物との直徑二分、深さ三分位に凹んだものと二種あります。ホックを打ち付ける時に、其ホックが潰れぬ樣に此凹みの穴を上から當てて槌で叩くのに用ひます。

一三、鳩目抜　尖端の方に至るほど細くなつた卷煎餅に柄をつけた樣な格好の鋼鐵で作つたもので、その穴の尖端の緣に刃が付けてございます。而して大小の二種ありまして、大の鳩目抜の方は、其丸穴の直徑が一分五厘で、小の方は五厘で、何れも用布に穴を明ける時に用ひます。

一四、鉛臺　鉛で作つた幅一寸、丈一寸五分、厚さ五分位のもので、鳩目抜で、布に穴を明ける時に、用布の下に敷く臺に致します。

一五、口金入　鋼鐵で作つたもので、其先が大きく丸く半に開き、それに丸い木の柄がついてあます。藝口やバックの口金をつける時使ひます。

◇袋物の材料

用布　**皮**　**縫ひ糸**　**型紙**

一、用布　用布の品質はその人の好みによつて、如何樣布地を用ひても宜しうございますが、鍍をかけた時または僅かな濕りのために縮んだりするものは避けねばなりません。

二、皮　色々の種類がありますが、なめし皮、鬼皮、銀付のへがし皮等用ます。

三、縫ひ糸　縫ひ糸は主として絹絲を用ひます。木綿絲や人絹等は絹絲と違つて締めが弱く、直ぐに切れがちでございますから、なるべく用ひないが宜しいと思ひます。

四、型紙　型紙は用布に貼るものと、芯紙用のものと二種あります。即ち(イ)生判紙、生漉きの日本紙で、總て用布に貼る型紙に用ひます。(ロ)張子紙、漉き返し紙、草紙の樣な紙で地の厚いものと地の薄いものと凡そ十五種ばかりありまして、一々番號で區別され、一番張子紙よりも二番張子紙の方が厚く、二より三、三より四番張子紙の方が厚いといふ樣に、その番號順に、次第に厚くなります。之は主として芯紙に使用し普通三より八までの間を用ひます。然し場合に依つては用布に貼る型紙とすることもあります。(八)大判紙張子

紙に似た稍々地の薄い質の脆い紙でこれは場合に依つて芯紙または型紙に用ひます。(三)板目紙半紙の板目紙で帳簿の表紙の樣な厚紙で、五枚張り以上十枚貼り位までの物を芯紙にすることがございます。

竹紙

五、竹紙　竹の皮を薄く漉つて製し、その裏に紙を貼つたもので、濡れものを入れる袋をこしらへる場合に貼ります。

經木

六、經木　木を極めて薄く板に削つたもので、檜等の芯に用ひます。

糊

七、糊　盤石糊と姫糊との二種を用ひます。而して盤石糊は紙入、煙草入、その他の口を貼る時や、鼈口或はバッグ等の口金を付ける場合に用ひ、姫糊は主として型紙を用布に貼りつける時に使用するのでございます。其他、鼈口用やバック用の口金、ホック、小鞠、護謨テップ、打ち紐、底鋲などが要りますが、それ等はすべて使用する時に説明することに致します。

名刺入

第六講　名刺入の拵へ方

皿刳り名刺入は名刺を横にして入れる、幅の廣い袋で、前を皿形に刳つたものでございます。

材料

〔**材料**〕名刺入は中に入れる名刺の大きさによつて丈の寸法も幅の寸法も割り出します。用布の寸法の割り出し方表用布の幅は名刺の丈より六分廣く丈は名刺の幅の二倍に八分加へた物、裏用布は幅は表用布と同寸法に裁ち丈を一分五厘短かく致します。

説明の都合上幅一寸五分丈二寸七分の大さの名刺を入れる名刺入を拵へることに致します。そしてこれに要する材料は次ぎの通りでございます。

表用布　幅六つ割(大幅を六つに割つた幅を云ふ)のものを丈三寸八分

裏用布　幅六つ割のものを丈六分五厘他に七番張子紙と生判紙を少々で。

名刺入出来上り圖

拵へる順序

裁ち方

拵へる順序

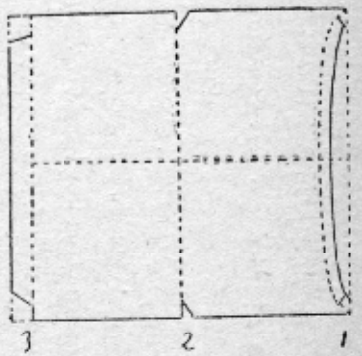
〔**裁ち方**〕(一)先づ表型紙から裁ちます。表型紙とは表用布に貼りつける型

紙の事を申します。此名刺入の表型は丈三寸八分(名刺の幅の二倍に八分加へたもの)幅三寸三分(名刺の丈に六分加へたもの)の物でございます。その裁ち方は、生判紙を裁ち板の上に縦に置き、最初にその右の端から一分程這入つた所へ眞直ぐに定木を當てそれを動かない樣に左の手でしつかり抑へ右の手で裁ち庖丁を胴握りに持つて定木の右縁に庖丁の刄を着け、向ふから手前の方へ引き乍ら裁ちます(以下裁ち方はこれに同じ)これで右横だけは眞直に裁ち終りましたから次ぎに定木を左の方へずらせ右の手で尺度を持ち今裁ちました右端から必要な幅の寸法三寸三分に計り其處へ定木を當ててそれを左の手でしつかりと抑へ定木の右縁を前と同じ仕方で眞直に裁ちます。

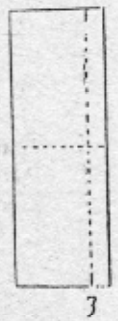
(二)次ぎにその三寸三分の幅を表を中にして正しく二つに折り輪の方を手前に兩横の裁ち目の二枚重なつた方を向ふに丈の兩端を左右にして裁板の上に置きます。そして丈の兩端はまだ裁ち揃へてありませんので不揃になつてゐますからそれを揃へる爲に丈の右の端から兩横の裁ち目の二枚重なつた方で眞直に一分の深さの切り込みを入れます。斯う致しますと幅の兩

横へ同時に切り込みがつきますから、それを續け切り込みが定木の右縁に行く樣に定木を當て左の手で抑へながらその間を裁ちます。次ぎにこの右の端を裁つた紙を元の通りに幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ兩横の裁ち目の二枚重なつた方で今裁ち揃へた丈の端から三寸八分のところに切り込みを入れ前と同じ仕方で不用の紙を裁ち捨てます。すべて何れの時でも幅の兩横と丈の兩端を裁つ場合にはこの樣にして裁ちます。これで幅三寸三分丈三寸八分の正しい形に生判紙が裁ち上りましたから次ぎに縫ふ時の便利を計つて要所々々に切り込みを入れます。

第一圖 表型紙



第二圖 裏型紙



(三)幅を正しく二つに折つて前の樣に輪の方を手前に裁ち目の二枚重つた方を向ふに丈の兩端を左右にして裁ち板の上に置き兩端の裁ち目の二枚重なつた方で丈の右の端から一分五厘の處に二分の深さの切り込みを入れ丈の右の端で二分五厘の深さになる樣に其處を鈎の手に裁ち落します。(これが反對に左の端で鈎の手になる事もありますが何れにしても、これからはこの仕方を單に鈎の手に裁ちます)といふ事に致します。

(四)次ぎにその一分五厘の鈎の手の所から一寸七分の所に五厘の深さに眞直ぐに切り込みを入れそれを右の方に五厘斜に曲げて三角に裁ち落しますこれから斯うして三角に切り込みを入れる事を單に切り込みを入れるといつて置きます。

(五)それから一寸七分から更に又一寸七分の所に切り込みを入れますと左の端の方で二分五厘殘りますから後の一寸七分の切り込みの處からその左の端二分五厘を鈎の手に裁ちます。而して初めの一分五厘を(1)とし次の一寸七分を(2)とし、最後の一寸七分を(3)とし、各々便宜上符號を付けて置きます(こ

貼り方

れからは斯うした符號を付ける場合には略して寸法の下に直ちに數字を書き入れることに致します。

(六)次ぎに其(1)の處で幅の中央を三分の深さにして兩横へ皿形に格好よく刳ります。これを擴げますと第一圖と同樣な表型が出來上ります。

第三圖
裏用布に型紙を貼り込む

(七)次ぎに裏用布に貼る裏型を裁ちます。裏型紙は幅三寸丈一寸に生判紙を裁ち例の如く幅を二つ折りにして丈の右の端から二分(3)の所に切り込みを入れ其處を鈎の手に裁ちます。而してこれを擴げますと第二圖と同樣な裏型が出來ます。

(八)次ぎに七番張子紙三寸丈一寸六分五厘の寸法で芯紙を一枚裁つて置きます。以上で全部裁ち終りましたから表と裏との型紙を用布に貼ります。

(貼り方)(一)表型紙の表側の周圍に緣糊をつけ(紙の端に三厘位の幅に糊を

附けることを緣糊といふ。表布の裏側に載せて、兩横を平に貼つて型紙の方から鏝を掛け、丈の兩端は表に袋を取つて（表布が型紙よりも少したるる位にする事）貼りつけます。

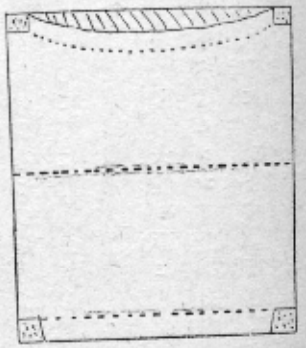
（二）次ぎに裏型紙にも、表型紙と同じやうに糊をつけ第三圖の樣に平に貼ります。この時型紙は用布よりも三分狹くなつてゐますから、一分五厘づつ、兩横へ用布を殘します。

（三）表と裏と貼り終りましたら表用布を型紙通りに切ります。しかし鈎の手や切込みのところは用布を切りませんで殘しておきます。裏は型紙の兩横に一分五厘づつ用布を殘して、三寸三分の幅に裁ち裁ち目にほつれぬ樣に緣糊をしておきます。

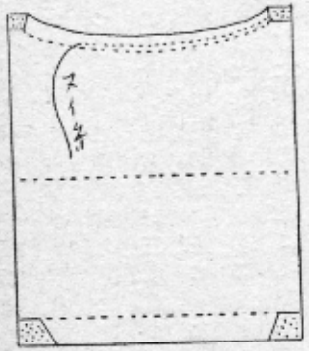
縫ひ方　（一）表裏の(1)(2)(3)の切り込みの所、卽ち第一圖の點線の所に定木を當てて鏝で筋を入れます。

（二）皿形にくつてある表型の(1)の所に表布の方へ糊をつけ、裏用布の型紙を貼らない方の丈の端と重ねて中表に貼りますと、第四圖の皿刳りの上の所で

第四圖
皿刳りを表と裏と貼り合す



第五圖
皿刳りを表裏表逢び合す



裏用布は眞直ぐになつてゐますから、これを表に合せて裁ち捨てます（第五圖）而して一分の縫ひ代（筋より五厘外側）で一針拔きに縫ひ、縫つた絲を切らない程度の深さで第六圖の樣に一分置きに眞直ぐに切り込みを入れ、五厘の折り代で（筋の所になります）表型の方へ貼りつけ、第七圖の樣に外表に返して表用布を五厘袱かせて裏用布の方から鏝をかけます。此處は後に袋の口になる所でございます。

（三）次ぎに表用布の方を下に、裏用布の方を上にして、皿刳りの所を向ふにして第七圖の樣に裁ち板の上に載せ、表型の(1)の筋から(2)の筋までの兩横の紙に糊をつけ裏

用布の方の幅を少しつれ加減にして外表に貼ります。

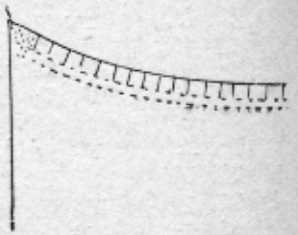
(四)次ぎに今貼り合せた裏用布の兩横に糊をつけて中表に折り返して平に貼りつけた所は第八圖の樣に表用布が一枚と裏用布が折り返つて二重になつてゐます。即ち布が三枚重つて居り、そして裏用布に貼つてある裏型の筋が、皿刻りの表型の筋の上に重なつて居ります。

(五)次ぎに裏型の筋の端に糊をつけて裏型の方へ貼りつけます。

(六)次ぎに表用布が上になる樣に裁ち板の上に置き換へ、兩横の(1)の筋からの(2)筋の間に糊をつけ、その(1)の筋と(3)の筋とが重なる樣に(2)の筋から中表に折り返して平に貼りますと、裏の(3)の筋と表の(1)(3)の筋とが正しく重つてゐます。

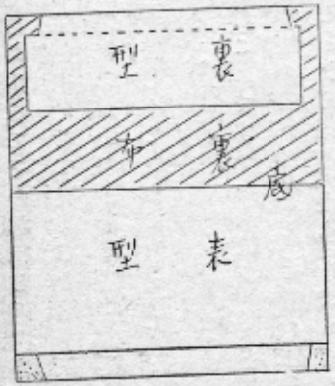
(七)以上で袋の大體の形に貼り上りましたから、その兩横を一分の縫ひ代で一針抜き、或はミシンで縫ひます。(一針抜き或はミシンで縫ふことを『縫ひます』といふ事に致します)。而して裏用布から、縫ひ代を裏用布の方へ折つて叩いてよく折りくせをつけ、そして表に返します。

第六圖
縫代に切込みを入れ



第七圖
同上を表に返し裏布より見る

第八圖
裏布を底より折返した圖



(八)その表に返した袋を兩横がキチント同じ寸法になる樣に目打又は筆で正しくし、そして前に裁つて置きました芯紙を裏用布との間に差し込みます。芯紙の差し込み方は先づ芯紙の兩横に各々一分幅で糊をつけ、その糊を兩横の縫ひ目につけて、表用布と兩横の縫ひ目の間へ入れるのでございます。(以下同方法でございますから芯紙を差込みます』と略します。

(九)次ぎに表用布の(3)の筋より端の二

仕上

分五厘の用布でその芯紙と兩横の縫ひ目とを包んで目打錐の尖端で貼り、そてし三厘袱かせて裏用布と貼り合せ、裏用布の方から鏝をかけます。而してその芯紙を差込みました時に芯紙が裏用布の丈よりも伸び出ますと出來上りが見苦しくなりますから伸び出ない樣に、注意を要します。(以下同樣でございます)。

(一〇)これですつかり縫ひ上りましたから霧を吹いた位の程度に濕した仕上げ布(糊の無い白木綿類)に暫く包んで置き、袋にうつすらと濕りが移つた頃を見凡そ十五分間位仕上げ布の中から取り出し、目打錐で角々をくつきりと出したり、縫ひ目の凸凹を鏝で直したり等致しまして、十分格好を正しくしてから、鏝をかけます。其時袋が汚れない樣に生判紙を一枚敷いて、其の上から鏝をかけます。

この方法を仕上げと云ひ、そして仕上げ布に包んで袋を濕しますのは、その濕りの爲に用布や芯紙がしなやかになり形が整ひ易くなるからでございます。仕上がすみますと全く出來上つたのであります。

材料

拵へ方

裁ち方

第七講　君が代銀貨入(二つ折)

君が代銀貨入は出來上り圖の樣に、君が代の音符を書き、其の上下に菊と桐との繪をあしらつた、高尚な銀貨入で裏側は深い口と淺い口と、二つ銀貨を入れる口が付いてをります。そして丈の中央から二つに折つて用ひます。

第一圖

出來上り圖

材料

表用布は幅六つ割(天幅を六等分した幅)の赤の鹽瀬を一尺一寸四分。同じ幅の白の鹽瀬を二寸八分。裏用布は幅六つ割。丈七寸九分(色と地質は隨意)西の内(紙)を一枚。

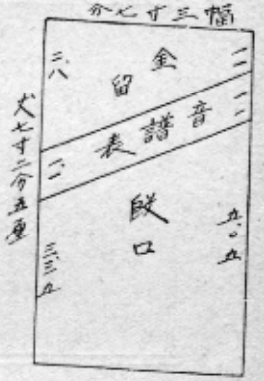
拵へ方

一、裁方

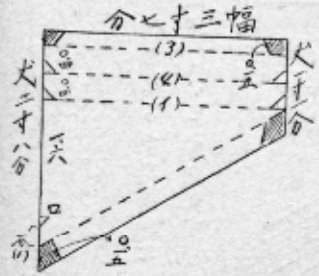
(一)西の内を幅三寸七分、丈七寸二分五厘に裁ち第二圖の樣に紙の表を裁板

金留表の型紙

第二圖
表型裁ち合せの圖



第三圖
表留金



の面に付けて縦に置き、右の横の向ふから一寸一分のところに標を付け、左横は向ふの端から二寸八分に標を付け、標と標に斜に定木を當てて裁ち鬼丁で裁ち落します。此紙は君が代の音符を書くところの型紙で音符表の型紙と申します。

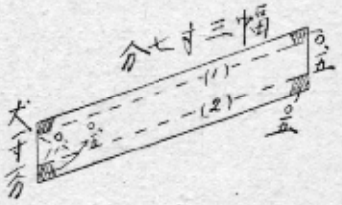
次にその裁目の端から各々一寸一分の處に印をつけ、其印から印に向つて定木を當てて鉋丁で裁ち落します。こうして二枚の型紙と裁落した殘りの紙は、右横が五寸五厘左横が三寸三分五厘あります。この紙を段口の表型と致します。

(二)次ぎに今裁ちました金留表の型紙を中表にして、丈の平な端と幅とを揃へて幅を二つに

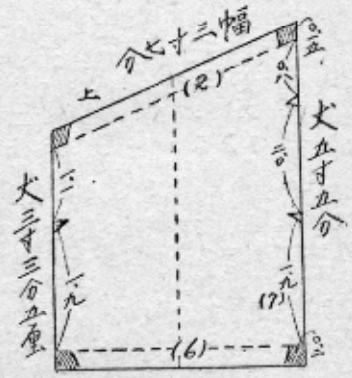
音符表の型紙

折り、丈の端の二枚揃つた方を右にして裁板の上にのせ丈の右の上の端から一分五厘(3)四分(4)四分(イ)の順に切り込みを入れこれを擴げて第三圖の樣に斜の端を手前にし、丈の長い方を左にして縦に置き、左横の(イ)の切り込みから一寸六分(ロ)一分(1)の順に切り込みを入れ初めの一分五厘(3)の端を右横の(イ)の切り込みを左横の殘りの一分五厘とを鈎の手に裁ちますと、圖の樣に金留表の型紙が出來ます。

第四圖
音譜表



第五圖
段口表



(三)次ぎに音符の表になる紙を第四圖の樣に斜に上つた方を右に、下つた方を左にして裁板にのせ、兩横とも斜の向の端から一分五厘(1)八分(2)の順に切

段口表の型紙

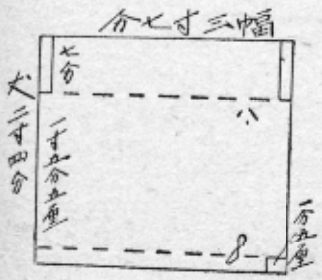
り込みを入れ、殘りの一分五厘と始めの一分五厘とを鈎の手に裁ちます、と第四圖の樣に音符表型が出來ます。

(四)次ぎに段口表の型紙を丈の一方の端の平なところを手前にして翻の方を向ふにして裁板にのせ、平の端から二分(6)一寸九分(7)の切り込みを入れ、丈の長い方の横に二寸(ロ)八分の順に切り込みを入れ、左の短かい横は一寸一分に切り込みを入れますと、一分五厘殘りますから、これを鈎の手に裁ちます。すると第五圖の樣な段口表の型紙が出來ます。

前口表の型紙

第六圖

前口表型



(五)次ぎに前口表の型紙を裁ちます。幅三寸七分丈二寸四分に西の内を裁ち、中表にして幅を二つに折り、丈の右の端から一分五厘(8)一寸五分五厘(八)の順に切り込みを入れ、殘りの七分と初めの一分五厘とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと第六圖の樣に前口表の型紙が出來ます。

金留裏の型紙

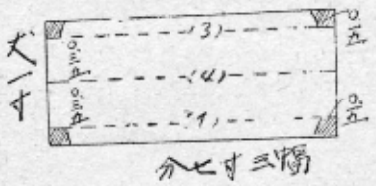
貼り方

(六)次ぎに金留裏型を裁ちます。幅三寸七分丈一寸に西の内を裁ち中表に二つに折り右の端から一分五厘(3)三分五厘(4)三分五厘(イ)に切り込みを入れますと一分五厘殘りますから、初めの一分五厘と共に鈎の手に裁つて擴げますと第七圖が出來上ります。

以上で型紙は全部裁ち上りましたから、次は用布に貼ります。

第七圖

金留裏型



二、貼り方

(一)先づ金留表型に緣糊をつけ(紙の表の方に以下同じ)型紙の上の端と丈一尺一寸四分の赤の表の端とを重ねて載せ、上を殘して三方を平に貼つて鏝をかけ上の端は表に裏取つて貼ります。

(二)次ぎに段口表型に緣糊をつけ、上の端と金留表の下の端とを突き合せて同じ用布に載せ周圍を平に貼ります。

(三)次ぎに前口裏型に緣糊をつけ殘りの用布の丈の一方の端と型紙の一分

五厘の鈎の手の端とを揃へ、段口表型との間へ用布を殘して周圍を平に貼ります。

(四)次ぎに音譜表型に緣糊をつけ丈二寸八分の白の表用布の上に布目が曲らない樣に載せて周圍を平に貼つて鏝をかけます。

第八圖

赤の用布に三枚の型紙を貼り合せの圖

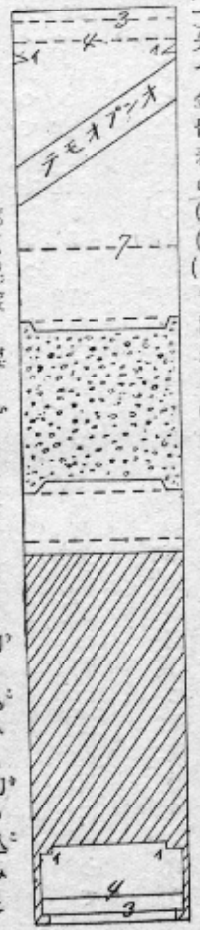
(五)次ぎに金留裏型の兩横と、一分五厘(3)の鈎の手の端に緣糊をつけ、丈七寸九分の裏用布の丈の一方の端と一分五厘(3)の鈎の手の端とを揃へて、平に貼つて鏝をかけます。

かうして全部貼り上りましたから金留表と音譜表とを型紙通りに裁ち切り段口表とは前口とは型紙と型紙との間へ用布を續けたまま兩横の幅を型紙に合せて裁ち金留裏は幅三寸七分にして眞直に兩横を裁つて置き周圍のほつれを防ぐために緣糊をしておきます。

三、縫ひ方

(一)先づ金留表の(3)(4)(イ)音譜表の(1)(2)段口表の(2)(7)(6)前口表の(8)金留裏の(3)(4)の切り込みに各々筋鏝で筋を入れます。そして切り込みと切り込みとが斜の位置にありますのは、斜になつたまま定木を當てて筋を入れるのであります。

第九圖



(二)次ぎに金留表の(イ)の筋の端に緣糊をつけ、音譜表の(1)の筋と(1)とを中表に重ねて貼りつけ、普通の縫代で縫つておきます。

(三)次ぎに音譜表の(2)の筋の端に縁糊をつけ段口表の(2)の筋と(2)と(2)とを中表に重ねて貼りつけ普通の縫代で縫ひます。そして(1)の筋も(2)の筋も音譜表の方に折つて糊で貼り鏝をかけます。

(四)次ぎに前口表の(8)の筋の端に五厘の幅で糊をつけ裏用布の裏型の貼つてない丈の一方の端と中表に重ねて貼り、並の縫代で縫ひ(8)の筋から前口表の方へ折つて糊で貼りつけます。

(五)次ぎに金留表の(3)の筋を裏に折つて貼り、金留裏の(3)の筋も裏に折つて貼ります。

(六)次ぎに金留表の(3)の筋から(4)の筋までの布表の兩横に縁糊をつけ(4)の筋から折つて(イ)と(3)との筋を中表に重ねて兩横を平に貼ります。

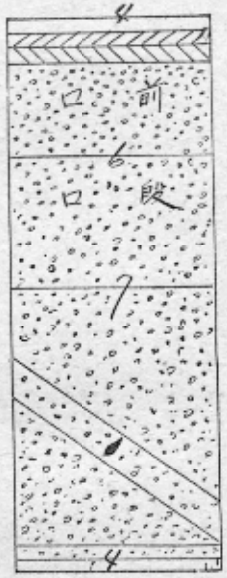
(七)次ぎに(8)の筋の縫ひ代を前口表の方に折つて貼り外表に返して表用布を五厘袱かせて鏝をかけます。そして裏用布の型紙の方を裁板の上につけて裏用布を向ふに表用布を手前にして縦にして載せ前口表の(8)の筋を金留の(2)の筋から五厘離れた所に重なる樣に裏用布を中表に折り返して兩横を

縁糊で貼りつけます。すると裏用布で深口が出來て、其上に表用布が重つて居りますから、其兩横も深口の底まで貼り合せます(この時裏用布を五厘づつ兩横でつらせて貼ります。)

(九)次ぎに段口表型の(6)の筋の端の二分(型紙の面)に糊をつけ外表に貼りますと、型紙の(6)の筋の所が折り目になつて型紙のない用布がかりの所と、段口型紙の貼つてある所とが外表になつて二枚重ね

第十圖

金留及上げ前の口圖



ます。此の折り目の(6)の筋と前口表の(6)の筋と重ねて兩横を貼ります(この時は前口表を少し弛ませます)と其處に前口が出來ます。そして其間は表用布が三枚と裏用布が二枚重つて都合五枚の用布が重つて居ります。

(一〇)次ぎに金留表の(4)の筋から段口表の(7)の筋までの兩横に縁糊をつけ

て(7)の筋から中表に折つて貼りますと前口と段口との上に金留表と音譜表とが重なり型紙の方が上になつて居ります。次ぎに金留表の(4)の筋と金留裏の(4)の筋とを重ね、且つ前口表の先きの(8)の筋と金留表の先きの(3)の筋とを正しく突き合せますと裏金留の先きの(3)の筋と表金留の先きの(3)とが五厘の差になつて重り、又前口表の(6)の筋と段口表の(6)の筋とが重り金留の兩横を貼り、次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と(8)の筋から(6)の筋までとの兩横を貼り次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と(8)の筋から(6)の筋とが重り金留表や段口表の(ロ)が重なることになりますから、先づ裏と裏との金留の兩横を貼り、次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と(8)の筋から(6)の筋までとの兩横を平に貼ります。すると筋の所で一番上に重つてゐる表用布が五厘弛みますからその弛みを其處で縫せます。そして兩横を並の縫ひ代で縫ひ、裏用布の方から縫目の直ぐ内側に筋を入れ、その筋から裏の方へ折つて叩いてよく折り癖をつけ、金留の(4)の筋と(4)の筋との間から外表に返します。

(二)次ぎに仕上げ篦や目打錐を中に入れて兩横の縫ひ目の凸凹をよく正し

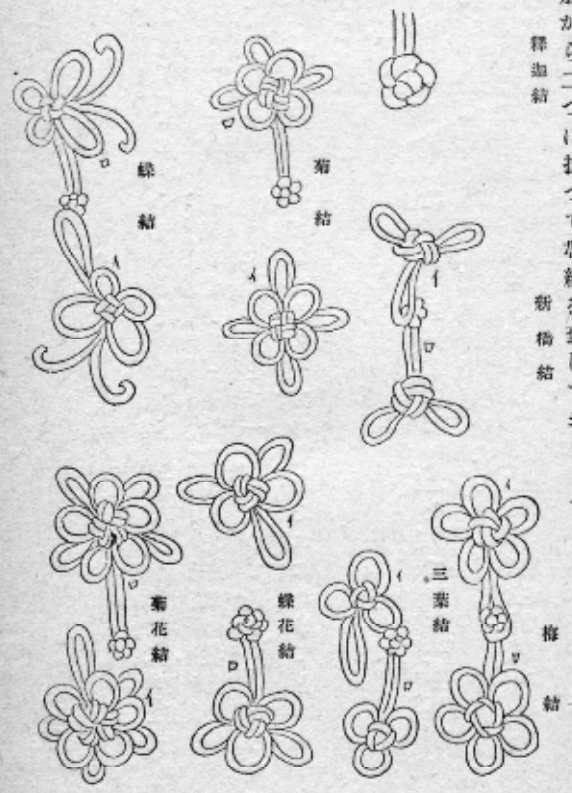
紐飾り出來上り圖

金留表を外表に返してその表用布の方を五厘出せて口を貼り合せます。

かやうにして全部出來上りましたから丁寧に仕上げをし段口を中にして(6)の筋から二つに折つて帶紙を致しておきます。

第十一圖

紐飾り出來上り圖



紐飾のいろ〳〵

第八講　紐飾の結方

此の結び方にはいろ〳〵あますが、新橋結、三葉結は被布、合羽、道行、コートの胸飾りに用ひます。梅結、蝶結、蝶花結、菊結、菊花結は子供の被布の飾りに用ひまして、出來上り圖のやうに、(イ)と(ロ)とで一組になつて居ます。そして一方にはすべて釋迦結がついて居まして、一方の輪をそれにかけてとめるやうになつて居ます。

材料

材料

大人物のコートは共布を幅三分位に切り、之を綿して直徑一分位の打紐の太さに作るか、又は絹か、瓦斯の打紐を使用いたします。

子供物は絹又は瓦斯の打紐を用ひます。色は赤桃色等好みのものを使用いたします。

結び方

釋迦結び

結び方

一、釋迦結　第十二圖の(1)樣に結輪を作ります。そしてその輪を一つねじ

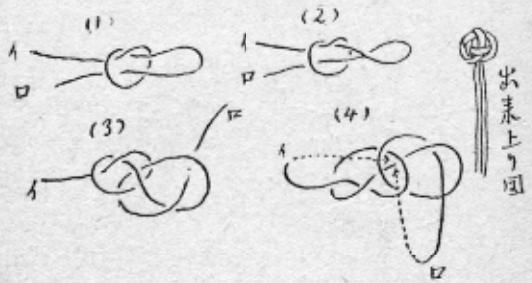
新橋結び　梅結び

て(2)一方の端(ロ)を其中に入れますと(3)となります。これを裏返して(4)の通り、兩方の端(イ)と(ロ)を夫々矢の方向に輪の中に入れまして、小さく締めますと出來上り圖の樣になります。釋迦結一箇に對して紐の丈一寸五分を要します。

二、新橋結　四寸五分の紐の兩端を絲でかたく結んで圓く輪を作り、第十三圖の樣にこれを三つの折山(2)にして(2)の樣に(イ)を(ロ)の上に、(ロ)を(ハ)の上に、(ハ)をはじめの(イ)の輪に入れますと(3)の出來上り圖になります。

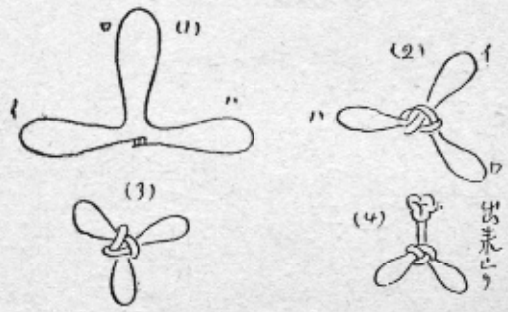
三、梅結　紐一尺で第十四圖の樣に(1)輪第一の花瓣を作り、それを一つねじて(2)一方の端(ロ)をその輪に入れますと、(3)の樣になります。次に(4)の樣に(ロ)の端を全部引き拔かないで、又一つ輪第二の花瓣を作ります。

第十二圖
釋迦結の結び方



菊結び

第十三圖
新橋結の結び方

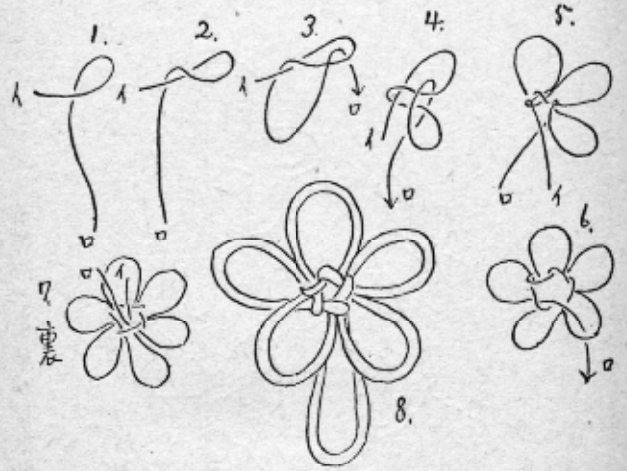


この方法(5)で(第三の花瓣をつくり、第四の花瓣も同じ樣にして作ります。次に第五の花瓣は(ロ)の端を最初作りました第一の花瓣の根元の輪に入れて第四の花瓣を通つてしめますと、(6)の五ツの花瓣が出來上ります。それから釋迦結にかける輪を作ります。その作り方は一と五の瓣の間に、それ等の瓣より少し長い輪を作つて、(ロ)の端を花瓣の根元に通して(イ)と(ロ)の先を裏側に短かくきつて絲でとぢつけて置きます。

四、菊結び 第十五圖の樣に一尺二寸の打紐の兩端を絲でかたくむすんで輪にして四つの折山を作ります。そして(2)の樣に(イ)を(ロ)の上に、(ロ)を(ハ)の上に(イ)を(ニ)の上に、(ニ)を(ハ)の上より最初の(イ)の根元

三葉結び
その他の結び方

第十四圖
梅結の結び方

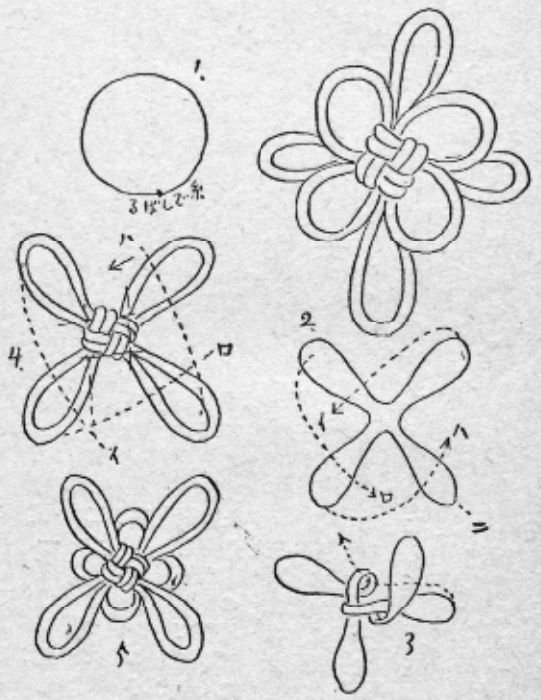


の輪の中に入れますと、(4)の樣に石疊みになります。これを今一度繰り返しますと石疊が二つ重なつて、(5)の樣なものになりますから、小さい輪を引き出しまして、裏返しますと出來上り圖の樣になります。

三葉結は六寸の紐で出來上りますから圖の樣に輪を三つに、**蝶結**は一尺の紐で輪を四つにして、**梅結**と同じ方法にして作ります。

蝶花結は一尺で折山を三つ作り、**菊花結**は一尺四寸で折山

第十五圖
菊結の結び方



を五つにいたしまして、菊結と同じ方法にして作ります。

出來上り圖で見えます樣に釋迦結のついてゐる(ロ)と記してある方は、前に申しました寸法に一寸五分を加へたものを使用いたします。

婚禮用

第九講　進物の拵へ方

我が國は神代の時代から人に物を贈るに木の枝につるし、或は草木を折り添へるとか又は藁や繩で束ねたりなどしたものだそうであります、現今でもなほ赤飯に南天の葉を載せるとか、鮭魚に笹の葉を添へるなど、風流な習慣が殘つて居りますが時代の進運につれて、こうした古風は次第にすたれて只品物を紙に包んで水引を掛けるやうになりました。

この紙や水引の種類、用途、其の包み方、結び方等に就て說明して見ませう。

包紙の種類

品物を包む紙には大高(奉書の少し厚いやうな紙を縮緬のやうに縮ませたもの)杉原奉書、改良奉書、糊入、美濃紙、西の內半紙、色紙(赤、金、銀)等があります。

包紙の數

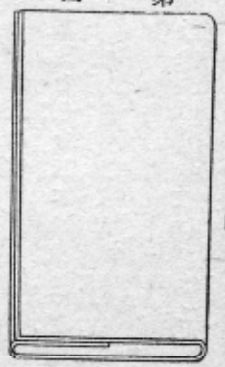
婚禮に關する贈答品は二枚の紙を以て包みます。紙は大高、杉原奉書の何れかの白を二枚用ひるか、又は白一枚、赤一枚を重ねて用ひます。

凶事用

普通の贈答用

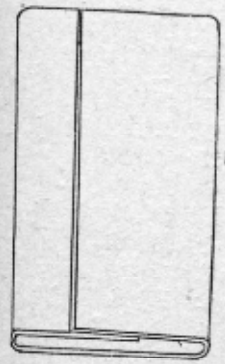
紙二枚で包む場合

第一圖



包紙の端が左の端になる圖

第二圖



品物が大きな場合に包紙の端が途中で左に向つてゐる圖

凶事に關する贈答品は一枚で奉書以下の白紙を用ひます。

其の他の贈答品は改まつた場合は二枚、略式は一枚を用ひます。

紙を二枚又は一枚といふ事は、二重又は一重の意で、大きな品物の場合に紙一枚の大きさでは包み覆せぬ物は、二重を二枚又は三枚用ひるか、一重を二枚又は三枚用ひる場合もあります。小さい物は一枚の紙を二つ折りにして包んでも差支ありません。

包み方

品物を二枚で包む場合は紙の表を外に裏を中にして重ねます、そうして品物を紙の上に載せ、紙の左を先に右を後から折ります、こうすると紙の上の端は品物の左の

祝儀及び日常贈答品用

端（第一圖）又は途中で左に向つて居ります。（第二圖）之れが祝儀や日常贈答品の包み方でありますが、凶事の場合にはこうして包んだものを表書を書くときに逆にして書きます、そうすると包紙の端は右の端又は、途中で右に向つてゐます。

水引の種類

祝儀及び日常贈答品用の水引

紅白、水引の中央から一方を、唇に附ける紅で染めたもので一方は白色をして居ります、これは最も本式の水引で宮中皇族方等の正式の場合にお用ひになります、紅を左に白を右にして結びます。

赤白、これは中央から一方を赤に染めたもので、民間で祝ひ事や普通の場合に用ひ赤を右に白を左にして結びます。

金銀、中央から一方に金、一方に銀の紙を巻いたもので華やかな場合に用ひ金を右銀を左にして結びます。

赤金、中央から一方に金の紙を巻き、一方を赤く染めたもので華やかな場合

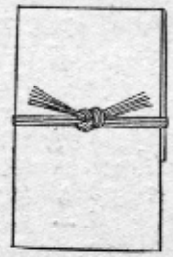
凶事に關する贈答品用

細工用の水引

第三圖

眞結び

第四圖



凶事用眞結び

第五圖

鮑結び（切りし）

に用ひ、金を左に赤を右にして結びます。

凶事に關する贈答品用の水引

全部白、これは凶事用の木式でありますが、土地によつては全部黑、または白、黑、白、黃、白、銀などを用ひます此の場合は白を左にして結びます。

細工用の水引

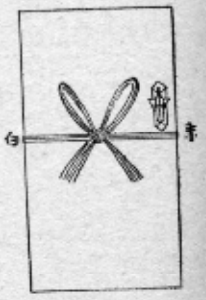
金、銀、紅、竹の葉、青四筋、白一筋、松葉、元結を青く染めたもの、五色、一筋づつ異つた色を五筋束ねたもの、奴絹絲を卷いたもの、赤、黃、紫、時、藤、桃、青、綠等種々の色があります。

水引の結び方

結び方には樣々のものがありますが其の基礎となるものは左の四種で其の他は應用した

眞結び

第六圖

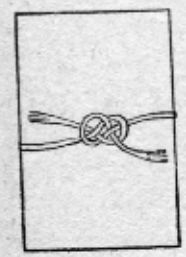


一本の蝶結び（折りし）

第七圖

二本の蝶結び（結びし）

第八圖



逆鮑結び

鮑結

ものであります。

眞結び　此の結び方はコマ結びとも申しまして、引けば引く程結び目が堅くなつて解けない結び方でありますから、二度あつてはよくない事即ち、婚禮凶事などに用ひます。

婚禮の場合は華やかな水引を二本で結び其の先は切らずに、一筋〳〵に目打か箸の如き細い物の先きで卷いて置くか（第三圖）又は、大きく輪にして置きます。

凶事の場合は白又は白黑の如き凶事用の水引一本で結び、其の先きは必ず切つて置きます。（第四圖）

鮑結び　此の結び方は凶事以外には何に用ひても差支へありません、水引は紅白其の他

蝶結

逆鮑結

の華やかなものを用ひ、其の先きは婚禮には卷くか、又は大きく輪にするか致します、普通は切つても宜敷いのであります。（第五圖）

蝶結　此の結び方は花結びとも申しまして、引けばすぐに解ける結び方でありますから、婚禮や凶事の如く、二度あつては惡い事には用ひませんが、其の他の祝や、普通の贈答品には何に用ひても差支へありません、水引は赤白、其の他華やかなものを用ひ、水引の長短と品物の大小とによつて一本又は二本で結びますが何れでも差支へありません。（第六、七圖）

逆鮑結　此の結び方は凶事に關する場合の他は用ひません、水引は凶事用の物を一本で結びます。（第八圖）

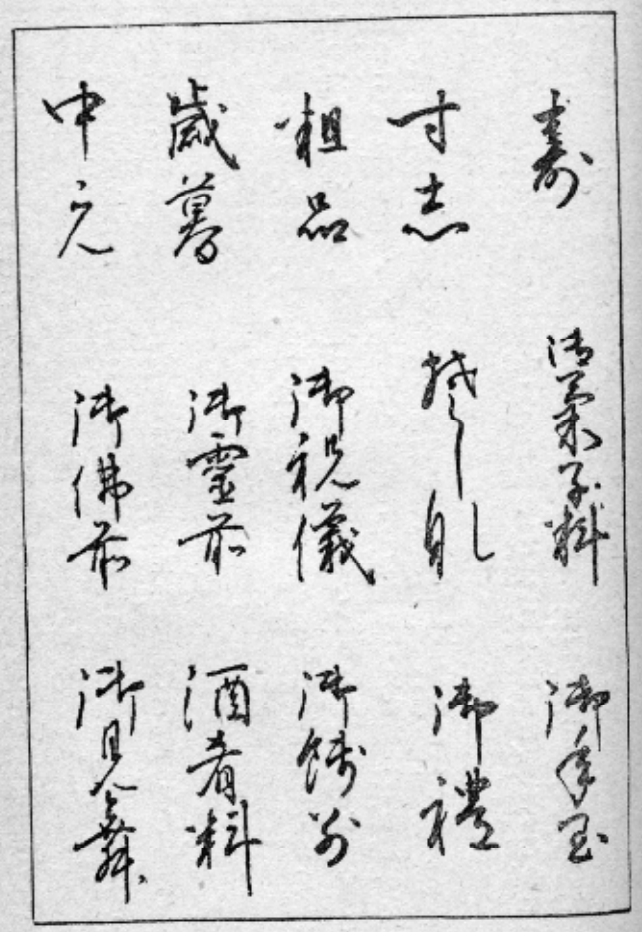
次に表書の書き方について述べませう。

表書の書き方

表書は贈答しやうとする意を明瞭に書き表はすやうに致します。例へば餞別、御年玉、御中元、御歳暮、御土產、御見舞、御禮等と書きます、又先方の御祝ひの場合は御祝儀、壽等と書き、自家に祝ひの場合は內祝、祝儀等と書きます。先方

表書の書き方手本

壽　御年玉　寸志　祖品　歳暮　中元　酒肴料　御前料　餞別　御祝儀　御見舞



に凶事の場合は御靈前御供物料等と書き、自家に凶事の場合は忌明、志等と書きます。

自作の手藝或は自製の茶などを進物とする場合は、自製と書くもよいと思ひます、書く字に因る場合は組品よりは呈呈上、松の葉、などがよろしいのであります。

表書の位置

表書は上の中央に書きます、先方の名を書く場合は上の左に、又自分の名は下の左に自書するのが本體でありますが、名刺を用ひる場合は取れぬやうに糊付にして置きます。金錢を贈る場合には包紙の中、又は裏に其の金額を「一金何圓也」と記し置きます、すべて書體は楷書で墨筆を本體と致します。

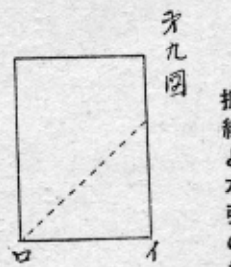
熨斗

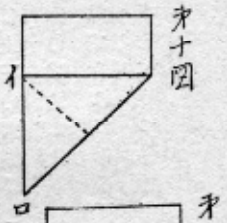
熨斗は鮮魚、干魚、鰹節、壽留女、卵、肉、鳥等の動物製品や、凶事に關する場合には添へません、其の他の場合にはすべて添えますが折熨斗、結熨斗、切熨斗の何れを用ひても差支へありません。

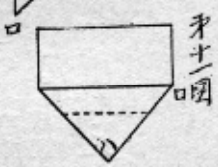
材料　金銀包

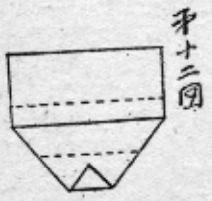
以上で進物の拵へ方についての大體を終りましたからこれから一つ一つについて委しく述べませう。

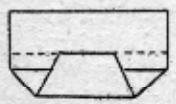
折紙と水引の掛け方

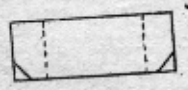












紙の折り方は紙の表を外に第九圖の如くにします。

金銀包　金銀包とは金銀を他家へ贈る金貨、又は銀貨を包む折紙の名稱で、此の折り方は金銀貨が飛び出す心配がありません。之れにかける水引の種類によつて吉凶何れの場合にも差支へありません。

材料　小奉書を一枚、第十圖の如く(イ)の角を

第九圖の點線に倣つて斜に折ります。第十一圖の如く第十圖の點線の處から折ります。金は(ハ)の所に入れるものですから、金の大小によりまして、第十一圖の點線の大きさを定めて、包んだ金の高は第十二圖の三角形の所に記入いたします。第十二圖の點線で示されてある通り、殘りの幅を三等分して、第十三圖の樣に折り、更に折ると第十四圖の樣になりますから、裏の丈の中央で上下の兩端が四分重なり合ふ樣に裏に折ります。そして折りましたものは包紙の耳が左方になつて、上下の兩端は包の裏の方で、上部の端が上になる樣に置きます。これで金銀包は出來上ります。金銀の折り方は此の他に樣々ありますが、普通一般に用ひられてゐる折り方で差支へありませんから略しまして、水引の基礎結の仕方にうつります。

水引の結び方

眞結と、一本で結ぶ蝶結とは、一般に用ひられて居りますから、略しまして鮑結二本の蝶結、逆鮑の三種の結び方を說明致します。

鮑結　水引は因事用以外のものならば何色でも差支ありません。長さは

鮑結びの結び方

第十五圖

第十六圖

第十七圖

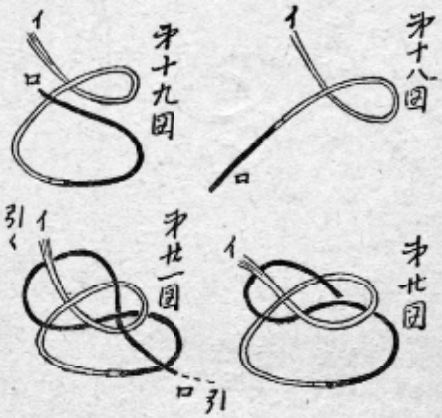
品物によつて定めますが、金銀貨又は紙幣の如きものを包んだ場合は、二尺の水引でよいのであります。

結び方　水引を掌で一二度しごき少し、しなやかにして第十五圖の如く(イ)一方の端を輪にして、第十六圖の如く(ロ)が輪の下を通り(イ)の上を通り、更に輪の左下を通つて、次に輪の中央で下側をすくひますと、第十七圖の如くなります。之れをしめながら水引の一本一本を平に致しますと、第五圖の如く鮑結が出來上ります。此の先は第三圖の如く卷いても、或は長いものは大きく輪にしてもよいのであります。

逆鮑　水引は白、白黑、其他の因事用のもので、長さは金包は一尺五寸か、二尺でよいのであります。

結び方　水引を一二度しごき、しなやかにして、第十八圖の如く、一方の端を輪にし、第十九圖の如く他の一方を

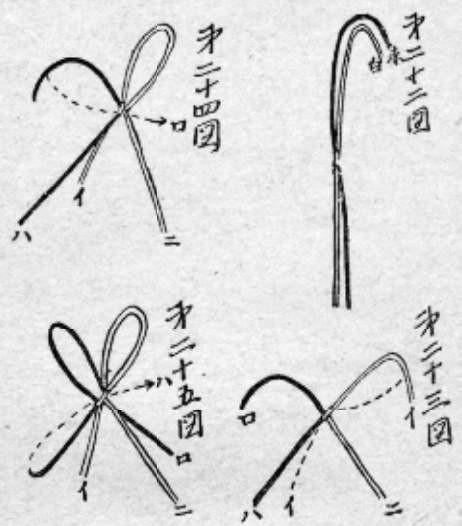
輪にして(イ)の下を通り第二十圖の如くし(ロ)の端を第二十一圖の如くぐるして、しめますと第八圖の如く出來上ります。兩端は包紙の横に出ない程度に切つて置きます。



蝶結　水引は凶事用以外は何を用ひても差支ありませんが、此の結び方は婚禮と凶事には用ひませんから、一般に赤白の水引を用ひます、反物などには二尺を二本、箱入の反物などには、二尺五寸を二本用ひます。

結び方　赤白二尺の水引を二本しごき、一本は赤を上に右手に持ち、一本は白を上に左手に持ち之れを更らに二本並べて縦に持ちこれを左の手にまとめて、帶(中央の色の境目)を持ち、中央から上の端までの部分が三等分されるやうに右の拇指をその間に挾んで觀く第二

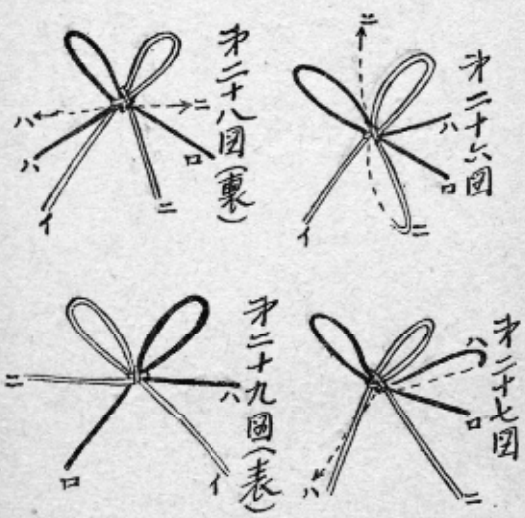
十二圖の如く丸い折目をつけます次に二本並んで居た左の方の水引が上になり右の方の水引が下になる樣にして一本づつ左右の手に持ち第二十三圖の如く十文字に重ね點線の如く(イ)を曲げ第二十四圖の如く(ロ)も曲げて輪を作り、第二十五圖の點線の如く(ハ)を左横から向ふ側に曲げ、帶の上の所から折り、帶が向側になるやうに第二十六圖の如くし、次に(ニ)を(イ)と(ロ)との間の下から上に向つて帶の上から折り、帶と帶とが向側で十文字になる樣にし、更らに二十七圖の如く(ニ)を上から下の方へ少し右斜に折り、第二十七圖點線の如く(ハ)をロ



の帶のそばの赤い輪に通して引きしめますと、第二十八圖の如く赤白とで石畳が出來ます。此の向ふ側は帶が十文字になつて居ります。

之れで結び上りましたから第二十八圖の(ニ)と(ハ)とを點線の樣に兩横に强く引き裏返しますと第二十九圖の如く白の輪が左に赤の輪が右になりまして、之れが表側であります。

品物に掛けるには(ニ)と(ハ)とを品物の裏側に廻して其の端を眞結に致します。そして(イ)(ロ)の端を揃へて切つて置きますと、第七圖の如くなります。



第十講　編物のあみ方（一）

編物を編む針には鈎針と、先が細くなつて居ります棒の針との二種があります。鈎針で編む編み方の一番基となる編み方はクサリ編、長編、短編（コマ編ともいふ）との三種ありますが、この三種の編み方はどんな子供でも編棒を持つ事の出來る人は大抵知つて居る編み方でありますから省略致しまして、實地に就いて申述べませう。

一、花びん敷

この花びん敷は、出來上り圖にもある樣に眞四角な形で斜かひのすかしが菱形の模樣のやうに出てゐます。ここに示しましたのは、五寸四方位の小さいもので、これを大きく編みますと、卓子掛にもなります。編み方は長編とクサリ編の應用であります。

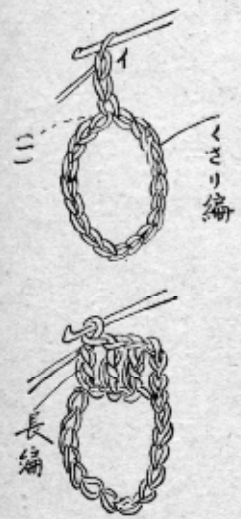
一、レース絲二個配合のよい色を一ケ（宛）　一、レース針（鐵製の鈎針）一本

全部を白で編んで置きますと洗濯しても變らなくてよいと思ひますが、小

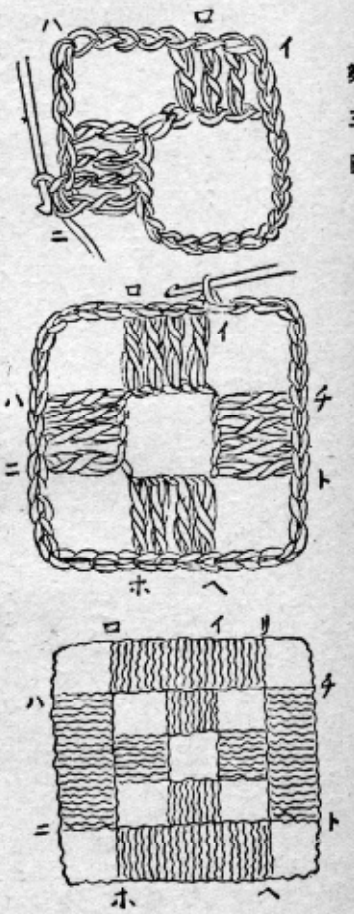
第一段 編み方

きい花びん敷などで早く汚れる心配のないものは中だけ白にして飾りは配合のよい別の色をつける方が美しく見えます。

編み方は先づクサリ編を十六編み、これを輪にして第一圖の(イ)の樣に、クサリ編を三つ編みます。それから三つのクサリ編みの根本の直ぐとなりの(1)のクサリから一つのクサリに一つづつ長編みを三つ編みならべます。この長編の高さは、先きに編んだ三つのクサリ編みと同じ高さにいたします。こうしますと、丁度第二圖のやうになつて、長編み三つと(イ)のクサリ編みとを合せて、四つの長い目がならびます。次に絲を其まま續けて第三圖の樣に(ロ)から(ハ)までの間にクサリ編みを八つして、今度は前の長編みのとなりの目から、長編みを四つならべて編みますと(ハ)(ニ)の



第一圖　第二圖



第三圖　第四圖　第五圖

樣になります、それから又クサリを八つ編んで長編みを四つあみますと、第四圖の(ニ)(ホ)の間のクサリと(ホ)(ヘ)の長編みが出來ます、それから又同じ樣に(ヘ)(ト)の間にクサリを八つして、(ト)(チ)の間に長編みを四つ編みます、(チ)のところからクサリを八つ編みますと(イ)のところに戻つて來ますから、最初に編んだ三つのクサリ編の頭のところで、絲をひきぬきにしてとめ、その絲を切らずに置き

第二段

ます是で第一段が出來ました。第二段は第四圖の(イ)の頭にクサリ編を三つこしらへ(ロ)までの長編の頭へ長編みを三つ編みならべます、そして第四圖の(ロ)(ハ)の間の八つのクサリ編の四つ目まで長編を四つ編みますと、第五圖の(イ)(ロ)に示すやうに最初の三つのクサリ編と長編み七つとで長い目が八つならびます、つぎに五圖(ロ)から(ハ)の間は矢張りクサリを八つ編み、第一段で編んだクサリ編みが、四つ殘つてゐる筈でありますから、この目のに長編を四つならべ、下の長編みの頭の上にも、その通りに四つ編みならべて、つぎのクサリ編の四つ目までずつと長編みを續けますと、第五圖の(ハ)(ニ)の間が出來るので、この間の長編の數は十二になります。

こん度はまたクサリ編を八つして(ニ)(ホ)が出來、長編を十二續けますと第五圖(ホ)(ヘ)の間の長編十二が出來(ヘ)(ト)の間にクサリ編を八つして(ト)(チ)の間に十二の長編をならべます。それから(チ)(リ)の間もクサリ編みを八つして(リ)から(イ)の間は長編四つしますと、第二段の編み初めのクサリ編に戻つて來ますから、三つ編んだクサリの頭で絲を一旦引きぬいて留めますと第五圖のやうに

第三段

第四段

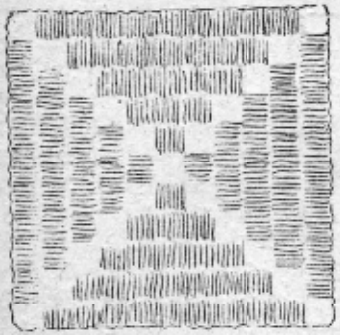
二段目が出來上ります。

第三段は編み初めのクサリ編の頭にクサリを三つ編みすぐとなりの長編の目から長編を十一編みつづけ、下のクサリの中央(四つ目)即ち第五圖(ロ)(ハ)中央の角まで來ましたら、またクサリを八つ編み下のクサリの五つ目から、下の長編みの頭を通つて、次ぎのクサリの四つ目迄、二十の長編みを列べます。

それからまたクサリを八つして、前と同樣に二十の長編をいたします、かうして四角でクサリを八つしては角から角まで長編を二十して(チ)(リ)の角から(イ)まで八つ長編をして、編みはじめのところに戻りましたら、前のやうに絲を引きぬいて留めます。

第四段ははじめにクサリを三つ編んで、すぐとなりの目から十五の長編をならべ、クサリを八つして下のクサリの中程から三段目の長編の頭の上を通つて、つぎのクサリの中

第六圖



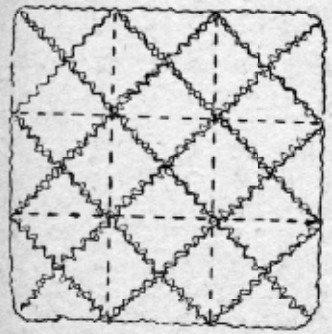
程四つ目まで長編を二十八ならべます。

それからまたクサリを八つして長編みを二十八ならべるといふやうにしてぐるりと一回いたしますと編みはじめに返つて來ます。

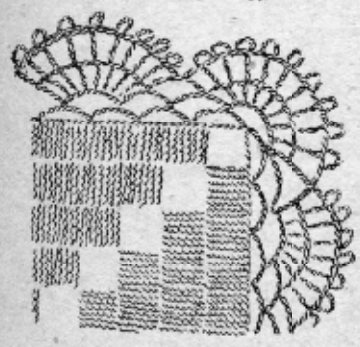
第五段

第五段の編み方は前と同じで、はじめにクサリを三つ編んで長編みを十九ならべ、クサリを八つして長編みを三十六ならべます。これを一回繰返して編みはじめのところにかへつて、絲を引ぬき、留めて切りますと第六圖の樣に眞四角の中に小さな角形のすかしが斜にならんだものが一枚出來上ります。この四角は、一

第七圖



第八圖



接ぎ合せ方

飾りの編み方

寸七八分位の四角でありますからこれを九枚だけ別々に編んで置きます、目はなるべく堅く引締めて長編みの頭をすくふ時には向ふ側だけすくひ、手前をすくはない樣にした方が宜しいのであります。

第六圖にある樣な小さい四角が、九枚出來ましたら表と表を中に合せて、角のクサリのところから共色の絲で引ぬきにして、一目づつ接ぎ合せて行きます。この時長編の頭で外側の目を一つだけすくひます。こうして三枚を一列に接ぎ、この三枚づつ接ぎ合せたものを第七圖のやうに接ぎ合せます。これもやはり中表に合せて、裏の方から目をひろつて行きます。

今度は地色の絲と配合のよい別の色絲にかへて、飾り編みを致します。先づ角のところから、クサリ編を六つして、四つ目のところへ短編でとめます。かうして四角の周圍を一回編み、そのクサリ編の上に、前と同じく六つづつのクサリを編んでは、となりのクサリ編の中央に短編で留めて行きます。

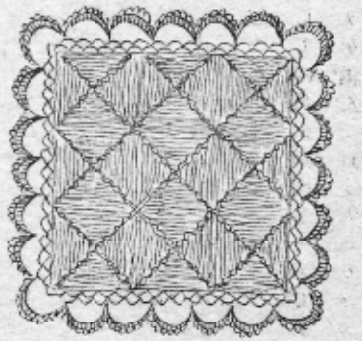
次には地色と同じ絲にとりかへて角のクサリ編の中に長編を九つしてつぎのクサリ編の中央に短編で留め、クサリを六つしてとなりのクサリの中央

に短編で留めます。かうして長編九つしてはつぎのクサリにとめ、クサリ六つしてはつぎのクサリにとめると云ふ順に周圍を一回編みます。

それから又二回編んだクサリ編の絲と同じ色にかへて、先きに九つした長編の上に長編を九つあみます、この時、下の長編の頭をすくつて一つ長編を編み、クサリを三つ編んで、このクサリを今編んだ長編の頭へ短編で留めて置きます。かうして頭に飾りのついた長編を九つしては、つぎのクサリ編の中央に留めクサリ六つして第八圖の樣にまたつぎのクサリ編に留めます、この編み方を一回いたしますと花びん敷が出來上ります。

第九圖

出來上り



一、網代編ショールの編み方

材料

一、毛絲　色は隨意で十オンス　太さは　地薄を好む人は中細

一、毛絲編鈎針（角製）一本

丈は長の人の隨意に致します。幅も勿論任意でよいのでありますが、普通幅は凡一尺位鎖編を編んで、その數が四で割り切れる數にしてこれを幅と定めます。そして一方の端から幅を行つたり戻つたりして編むのでありますここには說明の都合上鎖編百二十と致します。

編み方

先づ鎖編を百二十編んでこれを幅と定めます。次に第一圖の如く鎖編を三つ編み、それから幅の端即ち百二十の鎖編の最後の目に長編を三つ編み第二圖の如くし、それより四つ目の鎖編の中に短編を一つ編みます。第三圖を御覽下さい。

これで網代編が一つ出來上りました、この次は同じ事をくり返へすのでありますが、（第四圖）今一度申しますと、鎖編三つ編んで短編と同じ穴に長編を三つ編みます、そして又四つ目の鎖編に短編を一つ編みます、これで網代編が一

一段目初代あみ

つ出來ました。

第一圖

第二圖

第三圖

第四圖

網代編一つこしらへるには、鎖編三短編と同じ穴に長編三四つ目の鎖編に短編一、これだけ編めばよいのであります。

こうして編んで參りますと、最初の百二十の鎖編の上に、三十の網代編が第一段として出來上のであります。

二段目は、一段目の裏を見ながら編みますから、先づ裏返して一段を編んだ絲を續けて鎖編を三つ編みます。

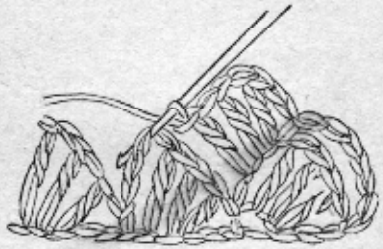
次に一段目の三つの鎖編の中に短編一つと長編三つとを入れますが、其の短編一つと長編三つとの間は鎖編を三つ致します。くり返して申しますと、一段目の網代編の鎖編三つの中に短編を一つして鎖編三つしてそれに長編を三つ入れます。之れで二段目の網代編が一つ出來上りました。このやうにして鎖編三つ短編の穴に長編三つ、一段目の次の鎖三つの中に短編一つを編みますと、二段目の網代編が又一つ出來上ります。こうして二段目を端まで行つたり戻つたりして好みの長さに編むのでありますが、別の色で筋を入れますには、丈を五寸程編んで絲の色を取り替へて一寸編みます、二筋に致しますには、地色で一寸編んで又色を替へて一寸編みま

二段目網代あみ

別色の入れ方

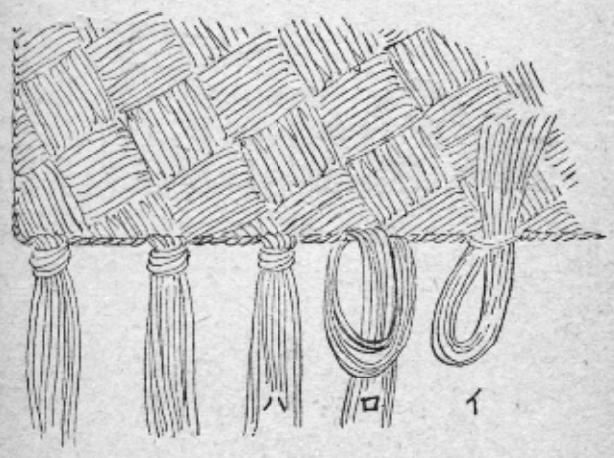
第五圖

第六圖



房の附け方

第七圖

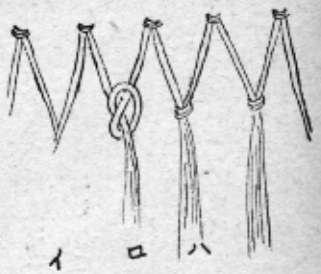


す。こうして元の地色で二尺程編みます。この長さは掛けて見て定めて戴きたいのでありますが、少し短い位に編んで置きましても、掛けてゐます中に延びますから、新らしいうちに丁度よい長さでは後に見苦しくなります。とにかく好みの丈に編んで一筋又は二筋の飾りを一方の端と同じに編みます、そして五寸程地色で編んで兩端の筋の丈や、其端の丈が同一の長さになりましたらば、切つて止めまして房を兩端に附けます。

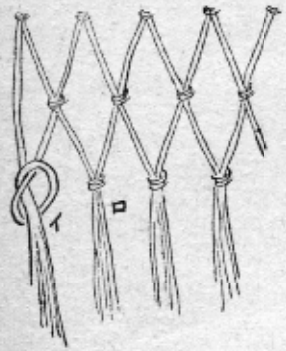
先づ地色の絲を六寸の丈に六本

房の結び方

第八圖



第九圖



切りまして之れをまとめて一筋としたものを十八筋拵へます、六寸の丈を二つに折つて三寸とし、其の輪を第七圖(イ)の樣に肩掛の幅の一方の角に表から裏に通し、其の輪の中に第七圖(ロ)の樣に三寸の先端を通して締ますと、第七圖(ハ)の樣になります、この樣にして兩角に通します、そして幅を十七等分して十八筋を全部通して、丈をそろへて切つて置きます。之れで一方の房は出來上りましたから一方の端にも同じ樣に拵へます。房の長さを最初八寸位に切りまして、七實に結んだのもよいものであります、其の結び方は第七圖の樣に通したものを第八圖の樣に六筋づつに分けて、輪

から五分位の所で隣の六筋が輪の中に入る樣にして輪を作つて結び玉を拵へます。こうして、全部を一度づつ結びましたらば、第九圖の樣に七寶形になる樣に、又も六筋づゝ隣と結び合せますと賑やかな房が出來ます。又房の代りに花瓶敷の飾りの樣な編方を致しても面白いものであります。

一、七寶編肩掛

最初必要な幅だけの長さに鎖編を致します。數は五分出來る樣に例へば五十とか五十五とか云ふ樣に作ります。それから針に掛つた目を五分位に延ばして大きい鎖編を一つし、その鎖の一本の絲に針を通して短編をして又五分位に延ばし、鎖をして前の樣に一本の絲に針を入れて短編をし、それを五つ目の鎖に短編で留めますと一つ出來ます。かうして次々と繰返して終りまであみましたら、裏返して又針に掛つて居る目を延ばして、第一段の樣に編んで二つ續いて居る其中(高い處)に短編みで止めて行きますと、七寶の形に編めますから所要の長さにあみ、最後の段は鎖五つしては高い處に短編で止めて行きます。飾はあつさりと房を付けるとよろしいでせう。

第十一講　編物のあみ方(三)

一、簡單で感じの好いヘーヤピン編の手提

用具材料

ヘーヤピン　一箱。　角製鈎針　一本。
人絹テープ(スピン二把)例へばローズ一把黑二把又は同色)
紐　二本。　紐通し輪　十個(直徑三分位)
ビーズ房　一個。　裏用布　少々(薄絹又は綿モス)

編み方

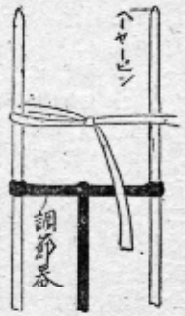
最初に御注意致しますがテープは捩らないやうにして頂きます。先づ初めに角製の鈎針で普通の鎖編みの初めのやうに一つの輪を作り、(第一圖)其の一方の端を二寸五分位ひ殘します。輪の長さはヘーヤピンの半分位ひに致します。そしてピンの(ロ)の針にはめ(二圖)長い方の絲を(イ)の前から後に廻し掃指で中央を押へながら(三圖)鈎針で(ロ)の針にある輪の下の方から上に出し、絲を抄つて中央で(四圖)短編を致します(五圖)

次ぎに鈎針をその(イ)の後の方に廻し(六圖)卽ち鈎の方が手前に向くやうな

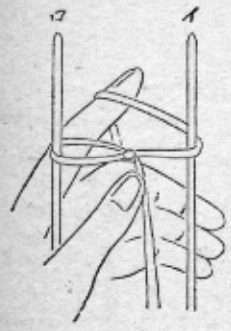
三段　中段

第一圖

第二圖



第三圖



形になります。絲が撰れぬやうに注意しながら、そのままピンを左から右へ廻しますと(ロ)は右、(イ)は左になります、又左側の卽ち(イ)の輪の下から上に針を出し(七圖)絲を抄つて短編をします(八圖)すると圖のやうに(ロ)は輪が二つ出來(イ)は輪が一つ出來ます。

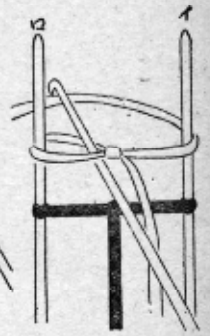
以下同じやうに繰り返しながら、兩方の輪を四十づゝ編みます、四十を編む間に調節器の上に一ぱいに編みましたら、器をはづして絲を下に送り又器をはめて編みます。そして終りに絲を二寸五分殘して切ります。

中段は、一段と同じ方法で兩方の針に目數が六十宛になる樣に編みます。

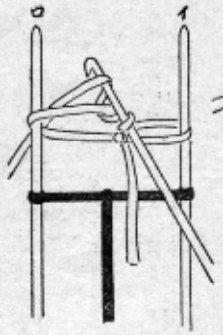
三段目卽ち上の段も、中段と同樣に兩方の

組み方

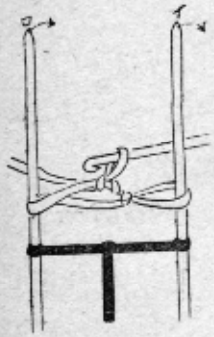
第四圖



第五圖



第六圖



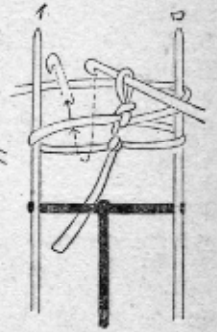
輪が六十になる樣に編みます。

是れで三段共編めましたから、今度は下の段卽ちわさ四十の分と、六十のわさの分とを組み合せます。

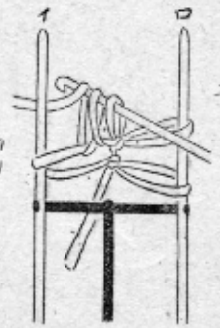
以上出來ましたらば、六十の目のものを二本とりまして平におき、兩鈎針で組み合せて行くのでありますが、それには練習しなくてはなりませんから、只今は便宜上で組み合せて參ります(第九圖A)先づ六十の目の二本を平な處に置きまして、右の一番下の輪を右手に持ち、左の一番下の輪を左手に持ち(第九圖B)右の輪を左の輪の下から上に出し、右手で押へます、

次ぎに左の二番目の輪を左手に持ち、右の

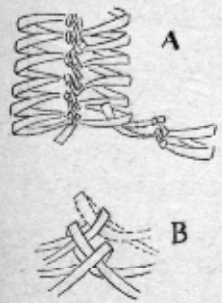
第七圖



第八圖



第九圖



輪の下から上に出します。

そして左手に持ち、二番目の輪を左の輪の下から上に出して以下同じやうに合せて參ります（其時輪は捩れないやうに注意して）

次ぎに、四十の目のものと、合せるのでありますが、前のは同數でありますから一つづつ組み合せれば宜しいのでありますが、是れは六十の目と、四十の目とを合せるのでありますから、六十の目の方一つと四十の目の方一つ六十の目の方二つと四十の目の方一つ、といつたやうに、六十の目の方は一度は一目、一度は二目、四十の目の方はいつも一目づつにして合せますと恰度都合好く終りが同時になります。

編ぎ方

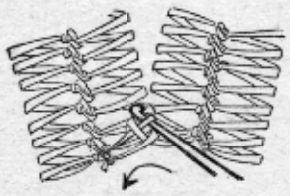
内側の袋は少し大きく

六十の目、二つに四十の目一つを組み終りましたら、四十の目は底になります。それから横をかがり付けます。それは、短編みのところは同じ色の絹絲で普通の縫針で、裏になる方から編み始めと編み終りとを、目立たぬ樣にかがり付けます、そして二寸五分程殘してあるテープの編み始めの分は、短編みをかがり付ける時に一緒にかがり付けて切ります。編み終りの二寸五分のテープは編み終りの最後のわさに通しましたら、編み始めの最初のわさ二本一緒に第十圖のやうにくぐらせて元の處卽ち編み始めのわさに戻して短編の處で絹絲でかがり付けて切ります。

四十の目の方が、袋の下部になりますから、わさの下の方へ同じ色の絲を通して固く裏で結んで置きます。上部はわさの上を別なテープで一つづつ短編みをして一週致します。

袋の內側へは小布を表の袋と同じ寸法より、少しゆつくりに縫ひます、そう致しますと表とシックリして肌分れになりません。

第十圖



底の造方

袋の口の造り方

底は普通の袋に縫つて底の絲を引きしめて表と裏とを底で縫針で留めます。そして前の南京玉を表に付け裏でよく留めて置きます。

上の方は短編みの處で布の端を少しまげ細かくまつり絎けにします。紐通しの輪が十個ありますから適宜のところに付けて、それに兩方から紐を通します。

是れで、すつかり出來上りました。スピンは二把共同じ色でも又中を一段變り色にしても宜敷いのであります。

一暖かくて丈夫な足袋カバーの編み方

器具、毛絲用　鈎針　一本。

材料、スコッチ又は毛絲凡そ三オンス。

拇指の拵へ方

第十一圖

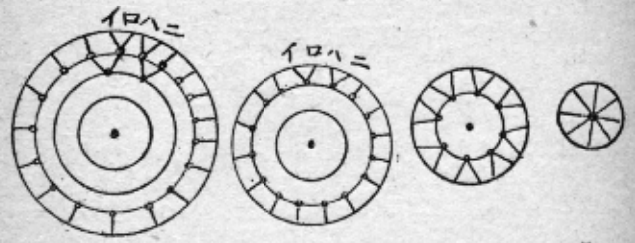
二重の輪

編方はすべて短編に致します。初め拇指を拵へますに第十一圖のやうに、二重の輪を作りまして、その輪に短編を八つ致しまして、輪の端の絲を引きしめます。（第十二圖）

二段目は、一段目の一つの目に二つづつ一廻り編みます

四本指の拵へ方

第十二圖　第十三圖　第十四圖　第十五圖



一段　目數八つ　二段　目數十六　三段　目數十八　四段　目數二十

と、全部で十六の目になります。（第十三圖）

三段目は、一つ目に一つづつ編みます。そして十段目までは增なしに十六をぐるぐると編みます、それで拇指が出來ましたから絲を一寸程殘して切ります。

次に同じ方法で四本の指の這入る先きを編みます。先づ拇指と同じ數で同じ樣に一段目と二段目を編み、第十一、十二、十三圖まで）

三段目は外側になる方、つまり小指になる方で目を二つ殖します。其の編み方は先づ一つの目に一つ編み、之れを說明の都合で（イ）と致します、その同じ目にもう一つ編み、之を（ロ）と致します、次ぎの目にも二つ編んで（ハ）（ニ）と致します、是れで目が二つ增したのであります、其他の目

甲の拇へ方

には一つづつ編んで一廻り致しますと合計十八の目になります。（第十四圖）

四段目は三段目の(イ)の目には一つ編み(ロ)と(ハ)との目には二つづつ編んで是れを(イ)(ロ)(ハ)(ニ)と致しますと、ここで二つ増したのであります、次ぎの目からは、一つの目に一つづつ編んで一廻りいたしますと合計二十の目になります。（第十五圖）

五段目は四段と同樣に(ロ)(ハ)の目には二つづつ(イ)(ニ)と其他の目には一つづつ編んで一廻り致しますと目數は二つ増して二十二になります。

六段目は五段目と同じに編みますと全部の目數が二十四になります。

七段目より九段目までも五段目と同樣に編みますと目數が三十になりますから、十段目は増減なしに一つの目に一つづ編みます。以上で四本一緒の指が出來上ります。

先きに編んである拇指の最後の目を編棒に一緒にして拇指と四本指とを連續させて、拇指の幾り絲一寸位を編み込みながら拇指の廻りを一廻り編んで、其の絲を續けて、四本指の廻りを一廻り編みますと、全く指が續いて、足袋の

足の拇へ方

ゴム編み

先きと同じ形になりますから、そのままぐるぐると足の文數の三分の二位まで同じ目數で編みます。

次ぎに踵を編みます、先づ全部の目數四十六を二等分して、二十三を甲とし二十三を踵と定めて一度平な處に置いてみまして目印をして、置きます、それから編み絲を續けて甲の方は編まないで踵だけを行つたり戻つたりして、幾度も編みます。此所まではぐるぐると編んで廻りましたから、表と裏とがはつきりとして居りますが踵は一段は表から、一段は裏から、いつも普通の短編を致しますから、どちらから見ても、くしやくしやとした物になります。これをゴム編と申します。ゴム編みで踵を拵へるには、行く時には端より一つ手前で止めます。止めたらすぐに裏返して戻ります、戻る時にはいつも鎖編みを一つして戻ります。詳しく申しますと踵の部分の二十三の目を表側を見ながら、一筋編みまして、今度は裏を向けて、一つ鎖編みをしてそして、裏側を見ながら、短編みをします、端より一つ手前まで編みましたら又

底の圖

表を向けて、鎖編みを一つして端より一つ手前まで編み、又裏を向けて、鎖編み一つして端より一つ手前まで編みます。

踵の後側の拾へ方

斯うして一段編む毎に目數は一つ少なくなります。それを繰り返して足に合ふ長さまで編むのであります。これで足の底は出來ましたから、踵の後側を編みます。

今度は踵の三方の周圍の目を拾ひながら一段編み、二段目から兩端で二つづつ目を減じて、九段目まで表裏と返してはゴム編みを致しますと踵の後側が出來ます。

踵と甲との連續

次ぎに今編んだ周圍の目を拾ひながら端まで編んで參りましたら、今度は甲の分の目を一つ拾つて編み、それから裏へ返して、二つ目を飛んで戻つて來ます、この時は踵の後を通つて一方の甲の端まで編みます。そしてここでも甲の目を一つ編みまして裏返します。こうしてゴム編みをするのです。いつも裏返したらば、二つ飛んで編んで戻ります。そして甲の處へ來たならば甲を一つ編みますから甲の目は一段毎に踵に連續されます。それを五六段

三角の拾へ方

甲の部の圖

編みましたら踵と甲の分との境ひが角になつて居りますから、其所へ三角を入れるのであります。

先づ角へ短編みを一つ編み、裏返して二目目は一段の上と甲と後側とへ一つづつ編みますと都合三つになります、次ぎは表に返して、二段目の上三つと甲と後とを一つ合計五つ編みます、こう致しますと、角が目立たなくなります。

つまり、角の處を三段編みますと、角の處へ三角が這入ります。その三段目をずつと續けて、表側を見ながら、甲の方向へ編んで參りまして、甲の分の目全部拾ひながら編みます。すると甲の一方の端に今一つ三角があります。そこへも又三角を編み入れます。それは甲の目全部拾つて編んで參りましたまま引き續いて、角へ一つ編み、二段目に三つ、三段目に五つ編みます。その三角の處の最後の目から引き續いてずつと踵の方向へ編みまして、グルグルと連續して三週致します。そして留めるのであります、是れで出來上ります。足の甲高の方は拇指と四本指との分を連續させてぐるぐる編み初めてから

二段目あたりで甲の部分で一つづつ二ヶ所程目を殖しますと宜敷いのであります。

一、靴下カバーの編方

お寒くなりますと概して、上氣して足が冷えて困ります、殊に學生は足袋より薄い靴下ですから足が冷えまして、衛生上好くない樣に思はれます、それで靴下を二枚はいてゐられる方もあります樣ですが、指先が冷えるのですから靴下カバーをおはきになると好いと存じます、そして學校では其のままスリッパを、おはきになるなり上靴をおはきになるなり、なれば大變に足の指先きが暖かであります。お足が暖かですと着物の一枚は遲ひます、薄着なさいましても結構たへられますから身輕く運動なさる事が出來て發育上大變よろしい樣に存じます。

又一般大人の方でも御活動にイヂケないで活潑に御働きになれる事と存じまして、あまりむづかしくなくて確かな時間で、編めますので其の編み方を申上げて見ようと存じます。

編み方

編み方も用具も足袋カバーと同樣であります。

一段目も二段目も足袋カバーと同樣に致します。(第十一圖)(第十二圖)(第十三圖)

三段目は、(第十六圖)の樣に兩方で目を二つづつ都合四つ殖します。其の編み方は、二段目全部で目が十六ありますから、先づ一つの目に一つ編み是れを矢張り(イ)と致しましてその同じ目にもう一つ編みそれを(ロ)と致します。

次ぎの目にも二つ編んで(ハ)(ニ)と致します。是れで一方に目が二つ増したのであります、そして次ぎの目からは一つの目に一つづつ六つ編みまして、七つ目は又目一つに二つ編みそれを(1)(2)と致しまして其の次ぎの目にも二つ編みまして(3)(4)と致します。そして其の次ぎの目からは一つの目に一つづつ六つ編みますと、三段の目が合計二十の目になります。

第十六圖

三段目數二十

第十七圖

四段以上

四段目は、三段目の(イ)の目には一つ編み(ロ)と(ハ)との目には二つづつ編んで是れを又(イ)(ロ)(ハ)(ニ)と致します。

此處で目が二つ又増したのであります。次ぎの目からは一つの目に一つづつ編みまして又、かた一方の(1)の處へ參りましたら(1)の目には一つ編みまして(2)と(3)との目では二つづつ編みまして是れも矢張り(1)(2)(3)(4)と致します、此處で又目が二つ殖えます、次ぎの目からは一つの目に一つづつ八つ編みます、と四段目を編み終り合計二十四の目になります。

五段目は、四段と同樣に(ロ)(ハ)と(2)(3)との目には二つ宛(イ)(ニ)と(1)(4)と其の他の目には全部一つづつ編みますと二十八の目になります。(第十七圖を御覽ん下さい。

六段目は、五段と同じに編みますと、全部の目數が三十二の目になります。

七段目より、九段目迄も五段目と同樣に編みますと、目數が四十四の目になりますから、十段目は、増減なしに一つの目に一つづつ編みます。

是れで五本の指先きが出來上りました。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の(1)(2)(3)(4)目數を増

した所を兩横にして平に置き一度形を整へてから足先きを入れて見て頂きます。そして肥つた方や甲高の方は、甲の方で幾つでも隨意に目數を増してそれから足底の長さの三分の二位ひまで、グルグル連續して編みます。

踵の造り方は、足袋カバーと同樣に編めば好いのでありますから、ここには略します。

一、赤ちやんの足袋

材料、色毛絲一オンス。　外に白毛絲少々。

之は一二歳用の足袋で、編方はやはり短編に致します。初め色絲を取つて鈎針で鎖を三十五編みます、それを最初の日に針を入れて輪に致しまして、大きさは此鎖でどうにでもなります(鯨尺で一寸八分程短編を致します。(笹編の出來る方は笹編でもよろし)此時にはだんだんと幾分か細氣味に編みます(目立たぬ處で目を飛ばし)と足首の所が格好よくなります。

次に絲を續けて足の甲の部としてゴムあみを一寸三分位致します。仕方は短編を十位しまして一つ鎖をし裏返して短編が十目まで來ましたらば又

材料

甲の編方

一つ鎖をして引返すのであります。（此部は疊編でもよろし）此時も先の方を少し細くする爲めに目を程よく減します。次に短編の部とゴム編の部とを一所に短編で廻つて一寸程編みます。此時にも目立たぬ所で目を飛ばして行きますと、自然に足の裏が出來ますから其處が一寸七分位になりましたら形を整へて眞直ぐの處で止めます。（踵が爪先の所で止める事）そして裏返して眞二つに折つて手前と向ふ側の目の絲を一本づつ抄つてかがり、堅く止めて絲を切ります。次に白毛絲で短編一つして鎖二つし、次の目に短編で止めて、又二つ鎖して隣に止めて行くと絲飾りがあつさりと出來ます。次は絲を二本にして長さ一尺一寸程鎖編をして紐を作り、足首の所に通します。そして紐の先には玉を付けます。仕方は絲を三十回位指先にまき、その眞中を紐の先の殘り絲で堅く結び、きれいに丸く切り落すのであります。

底の編方
飾り編

紐の作り方

裁縫と手藝 終

昭和二年五月十日印刷
昭和二年五月十三日發行

裁縫と手藝

定價七十錢

著者　大妻コタカ

發行者　東京市神田區三崎町三丁目一七四　宇野共次

印刷者　東京市神田區錦町三丁目一八　白井赫太郎

發行所　東京市神田區三崎町三丁目一七四番地　大興社
振替口座東京五三六八九番
電話九段一五六七番

著作權所有

大妻コタカ先生著

裁縫と手藝

裁縫は婦人の生命であります。他のことはともかくも裁縫だけは知らないと人から笑はれ女の恥となるのみでなく見たる資格がありません。本書は既に各處女會の教科書に採用してゐる立派な書物で、和服裁縫からつぎはぎ其他、各種編物まで親切に教へてあります。

菊版洋裝
頒る美本
金七十錢
送料六錢

住田たま子先生著

家事と禮儀作法

無作法な女程見にくいものはなく、禮儀正しい婦人程立派なものはありません。本社は立方座り方、客になる時客を迎へる時、洋食和食の食べ方、贈物や手紙の禮儀、婚礼葬祭の服裝まで數百種を誰にも分るやう説明し、尚毎日の掃除や清物の手入迄教へてあります。

菊版洋裝
頒る美本
金七十錢
送料六錢

久野蓮峯先生著
生花獨習秘傳

花道講義

生花は婦人に適した俱によい趣味であり、婦人の人格を發ります。本書は花瓶の種類や道具などの説明から、正月を始め梅桃、雛祭り、到夏の花水草、秋の花や冬の花四季それぞれの花の活け方から親切に説明されてあり、寫眞數十枚と給もあつて誰にもよく分ります。

菊版洋裝
頒る美本
金七十錢
送料六錢

早見君子先生著
見違へるほど美くしくなる

美容法と結髪

自分で髪が結へ自分でお化粧が出來たらアナタはどれ程嬉ほどれましよう。本書は讀賣新聞社會部長長谷川如是閑氏が最も新らしい髪の結び方、清物の漬方、婦人の四季それぞれに俱合ふ美容法の仕方を新婦人の十枚を合入れて親切に説明してあります。

四六判洋裝函入並製紋十入
一圓卅錢
送料十錢

東京市神田區三崎町三丁目
大興社
振替口座東京五三六八九番

東京大興社出版